ISSN 0289-4130

研究紀要

第17号

2002

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研　究　紀　要

第 17 号

2002

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　　次

序

［論文］

砂川期の基礎的研究(1) ……西井　幸雄（　1）
—大宮台地、武蔵野台地、相模野台地を中心として—

諸磯式土器の変遷過程……細田　　勝（ 29）

大宮台地における環濠集落の基礎的研究(1) ……福田　　聖（ 61）
—井沼方遺跡—1—

手焙形土器の形と型……高橋　一夫（ 91）
—足守川遺跡群を中心に—

埴輪の地域性……若松　良一（101）
—紀伊の埴輪のありかたから探る—

古代東国と豪族の家……田中　広明（129）

砂川期の基礎的研究(1)

—大宮台地、武蔵野台地、相模野台地を中心として—

西井幸雄

要約　砂川期は埼玉県所沢市の砂川遺跡を基準資料として設定された。砂川遺跡は、明治大学考古学研究室によって1966年と1973年に発掘調査が実施され、報告書が刊行されている。

当該期は、後期旧石器の中で、武蔵野台地編年Ⅱｂ期、相模野編年第Ⅳ期前半、諏訪間段階Ⅵに位置付けられ、ナイフ形石器の最盛期又は終末期石器群として、関東地方の後期旧石器時代研究の中で重要な位置を占めており、1979年と2000年の２回のシンポジウムで議論された。

本稿は砂川期の基礎的研究(1)として、大宮台地・入間台地・武蔵野台地・相模野台地の遺跡を対象に石器集中、礫群の数、石材組成、尖頭器の共伴問題を検討した。その結果、南関東地域を均一な地域としてみるのではなく、幾つかの視点によって区切られる小地域が存在することがわかってきた。

今後は、ナイフ形石器の分析等を行い、南関東地域での砂川期のあり方を検討してゆく。

はじめに

2000年７月、石器文化研究会主催の『砂川—その石器群と地域性』シンポジウムが開催された。筆者はその準備段階から関わり、砂川期の空間的枠組をテーマに発表をおこなった。そのベースになる考えは、1995年と96年に入間川流域の西久保遺跡、坂東山遺跡、屋渕遺跡の整理作業の際に抱いたアイデアと、それと対比する意味で執筆した「大宮台地の砂川期の様相」（西井　1996）である。また、尖頭器の問題に関しては、1996年に整理に携わった西武蔵野遺跡の樋状剥離を有する尖頭器石器群に関連して考えていたことである。

屋渕遺跡の報告、シンポジウムの発表に関して田中英司氏（1997)、白石浩之氏（2001）から手厳しいご批判をいただいた。本稿はこの批判に答えるための作業として、再度砂川期をテーマに基礎的研究から始めることにする。

砂川期の研究は、砂川遺跡の編年的位置、砂川遺跡で実践された研究法等多義的である。筆者は、発表要旨の中で前者を取り上げ、関東地域の旧石器編年の構築過程で田中氏の言う「大別編年」と「細別型式」をキーワードに、砂川遺跡の意味を考えてみた。しかし、その作業の中で白石氏が主にテーマとしている“ナイフ形石器の変遷過程”、“茂呂系ナイフ石器の発展過程”に関しては別のベクトルの中で議論してゆかなければならない問題であると考えている。

シンポジウムの発表要旨の中で、問題の抽出とその所在として

１、編年の問題

２、砂川型刃器技法

３、個体別資料の研究方法

４、ナイフ形石器の形態の問題

５、尖頭器の共伴問題

6、先刃掻器の共伴問題

以上の6点を列記したが、不十分なものであった。また、上記の6点に加え“研究史の問題”も白石氏の指摘どおり不十分であった。これらのテーマをまとめて議論する能力は筆者に持ち合わせていないので、本稿を基礎研究の1として、分析遺跡の提示と、遺跡の規模と石材組成、尖頭器の共伴をテーマに検討する。

1．分析対象遺跡

南関東地方中央部から西部にかけて、大宮台地、入間台地、武蔵野台地、丹沢山地、相模野台地、多摩丘陵を対象地域とした（第1図）。(註1)

大宮台地は宮代町の(1)前原遺跡第1石器集中(註2)、北本市の(2)提灯木山遺跡第2次調査第2文化層、さいたま市(3)C－26遺跡、伊奈町の(4)久保山遺跡、上尾市の(5)在家遺跡(註3)、前戸崎遺跡、川口市の(7)赤山陣屋跡第1文化層(註4)、(8)叺原遺跡(註5)の8遺跡とする。石器の出土層位はソフトローム層を中心としており、次の段階となる終末期のナイフ形石器、尖頭器石器群、細石器石器群と自然層による区分は難しい。また、縄文時代の遺構及び包含層の調査中に混じって石器が検出される場合があり、製品のみが単独で報告されている場合もある。

入間台地は鶴ヶ島市の(9)富士見一丁目遺跡(註6)、川越市の(10)鶴ヶ丘遺跡C区(註7)、入間市の(11)西久保遺跡第1文化層、飯能市の(12)屋渕遺跡の4遺跡を対象とする。入間台地は旧石器時代遺跡の調査件数が少なく、基準層位は明らかでないが武蔵野台地北西部とほぼ共通すると思われる。

入間台地と武蔵野台地は入間川によって画されている。加治丘陵は入間川とその支流の霞川に挟まれた丘陵部で入間市(13)坂東山遺跡は、その北端に位置している。

武蔵野台地の遺跡は、北西部から扇頂部に位置する入間川の支流、霞川の上流域に青梅市(14)城の腰遺跡(註8)。狭山丘陵を源流とする砂川堀上流域の所沢市(15)宮林遺跡第1文化層、(16)砂川遺跡、(17)中砂遺跡(註9)。下流域の江川の開析谷に面した富士見市(18)打越遺跡第2地点(註10)。黒目川上流域の東久留米市(19)多聞寺前遺跡Ⅳ中1石器群(註11)。白子川中流域の練馬区(20)丸山東遺跡第Ⅲ文化層。石神井川上流域には該期の遺跡が多く練馬区の(21)武蔵関遺跡(註12)、(22)天祖神社東遺跡第Ⅰ文化層(註13)、(23)葛原遺跡B地点第Ⅰ／Ⅱ文化層(註14)、(24)武蔵関北遺跡第Ⅱ文化層、(25)高稲荷遺跡第Ⅲ層下部～Ⅳ層上部出土石器とまとまっている。善福寺川源流の善福寺池周辺に杉並区(26)地蔵坂遺跡第Ⅲ／Ⅳ文化層(註15)がある。また、神田川水源に位置する井の頭池の周辺は、旧石器から縄文時代にかけて井の頭池遺跡群が形成されており、武蔵野市(27)御殿山遺跡第1地点D区Ⅳ層上部石器群、(28)吉祥寺南一丁目遺跡E地点Ⅳ上文化層石器群(註16)等がある。

武蔵野台地西部は、野川上流域の国分寺市(29)日影山遺跡第2文化層ブロック群Ⅰ、(30)日影山遺跡第2文化層ブロック群Ⅱa・Ⅱb(註17)、中流域の小金井市(31)前原遺跡第Ⅳ中1層文化(註18)、下流域の世田谷区(32)廻沢北遺跡第6次調査Ⅳ下2層文化(註19)がある。以上18遺跡、21地点／文化層を検討対象とした。

中津川上流域丹沢山地に位置する清川村宮ヶ瀬遺跡群は、(33)中原遺跡第Ⅴ文化層、(34)上原遺跡第Ⅴ文化層、(35)ザランケ遺跡第Ⅴ文化層の3遺跡から砂川期の良好な石器群が検出されている。

第１表　分析対象遺跡一覧

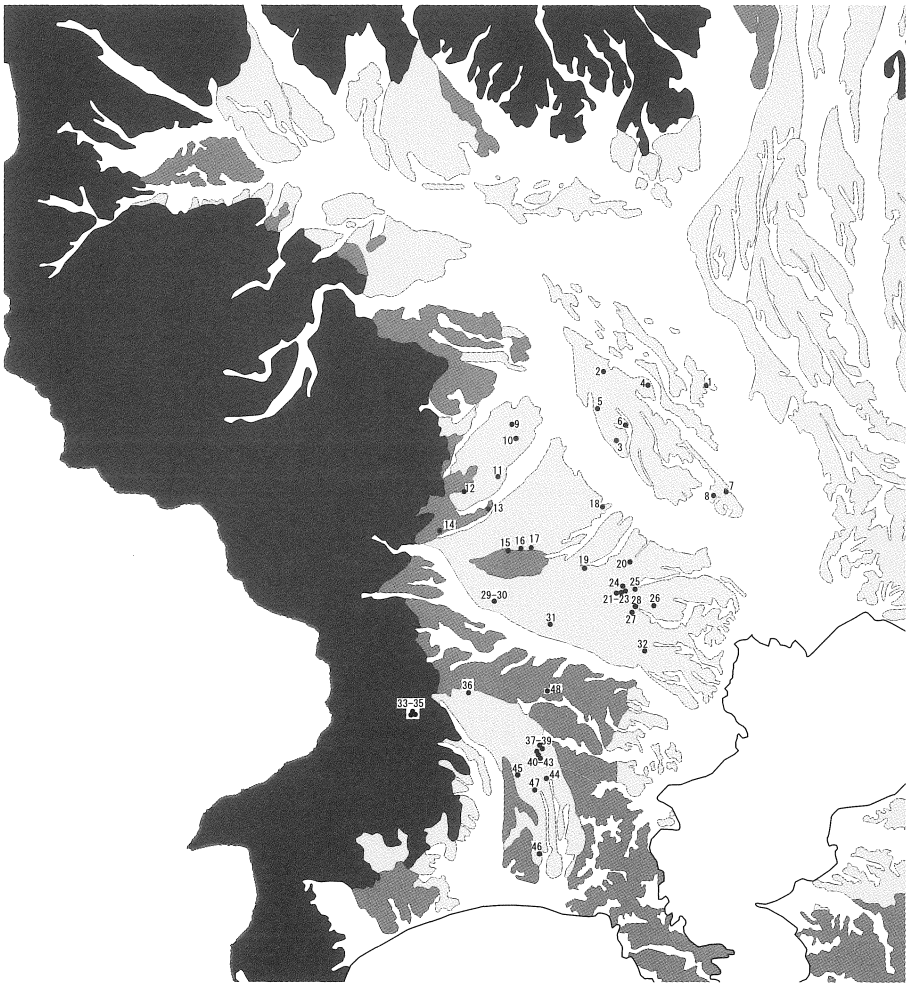
遺　跡　名	石器集中	礫　群	配　石	炉　跡	石器総数	ナイフ	尖頭器
【大宮台地】							
1　宮代町前原遺跡	1	0	0	0	約800	12	0
2　提灯木山遺跡	2	0	0	0	365	28	0
3　C－26遺跡	1	0	0	0	128	6	0
4　久保山遺跡	1	0	0	0	222	8	0
5　在家遺跡	10	0	0	0	－	－	－
6　前戸崎遺跡	1	0	0	0	114	4	0
7　赤山陣屋跡	2	0	0	0	174	6	0
8　叺原遺跡	9	0	0	0	1,513	52	0
【入間台地】							
9　富士見一丁目遺跡	3	0	0	0	193	19	0
10　鶴ヶ丘遺跡Ｃ区	1	0	0	0	－	－	－
11　西久保遺跡	6	0	0	0	2,277	33	0
12　屋渕遺跡	1	0	0	0	153	12	0
【加治丘陵】							
13　坂東山遺跡	1	0	0	0	570	14	0
【武蔵野台地】							
14　城の腰遺跡	4	2	0	0	221	12	0
15　宮林遺跡	5	1	0	0	447	22	0
16　砂川遺跡	6	2	0	0	792	48	0
17　中砂遺跡	－	－	0	0	－	－	－
18　打越遺跡	1	0	0	0	84	6	1
19　多聞寺前遺跡	6	5	4	0	319	19	0
20　丸山東遺跡	8	1	0	0	757	65	0
21　武蔵関遺跡	4	0	0	0	166	11	2
22　天祖神社東遺跡	14	0	0	0	2,792	72	1
23　葛原遺跡	15	37	0	0	1,330	81	10
24　武蔵関北遺跡	5	4	0	0	782	28	5
25　高稲荷遺跡	4	3	0	0	599	29	0
26　地蔵坂遺跡	2	2	0	0	135	13	0
27　御殿山遺跡	1	2	0	0	1,669	64	2
28　吉祥寺南三丁目遺跡	－	5	0	0	3,665	301	3
29　日影山遺跡Ⅰ群	8	1	0	0	193	22	0
30　日影山遺跡Ⅱ群	15	20	0	0	785	55	1
31　前原遺跡	－	11	0	0	299	41	0
32　廻沢北遺跡	3	0	0	0	308	16	0
【丹沢山地】							
33　中原遺跡	4	0	4	1	260	1	1
34　上原遺跡	36	9	3	3	2,137	129	0
35　サザランケ遺跡	4	0	1	0	592	28	0
【相模野台地】							
36　橋本遺跡	－	10	0	0	2,608	179	2
37　下森鹿島遺跡	16	10	0	0	498	40	6
38　中村遺跡Ｃ区	22	7	0	0	1,290	134	5
39　中村遺跡Ｄ～Ｆ区	21	9	0	0	706	86	2
40　下鶴間長堀遺跡	16	26	0	0	4,672	254	8
41　長堀北遺跡	4	12	0	0	470	58	2
42　長堀南遺跡Ⅳ文	27	23	1	1	1,800	127	1
43　長堀南遺跡Ⅴ文	4	1	0	0	277	20	0
44　深見諏訪山遺跡	3	2	0	0	270	22	7
45　栗原中丸遺跡	56	37	0	0	3,431	219	2
46　南鍛冶山遺跡	1	1	0	0	1,084	81	0
47　福田丙二ノ区遺跡	14	0	0	0	643	57	0
【多摩丘陵】							
48　向遺跡	21	19	0	0	631	66	2

相模野台地は、相模川の上流から相模原市の(36)橋本遺跡第Ⅲ文化層（Ｂ１からＬ２）[註20]、(37)下森鹿島遺跡第Ⅲ文化層（Ｂ１下）[註21]、(38)中村遺跡Ｃ区第Ⅴ文化層（Ｌ１Ｓ下からＢ･Ｂ２上部)、(39)中村遺跡Ｄ～Ｆ区第Ⅴ文化層（Ｂ･Ｂ０～Ｌ２)、大和市の(40)下鶴間長堀遺跡第Ⅲ文化層（Ｌ１Ｓ～Ｌ２)、(41)長堀北遺跡第Ⅵ文化層（Ｌ１ＳからＬ２上面)、(42)長堀南遺跡第Ⅳ文化層（Ｌ２上面)、(43)長堀南遺跡第Ⅴ文化層（Ｌ２中部)[註22]、(44)深見諏訪間山遺跡第Ⅳ文化層（Ｌ２上部からＢ１上部)[註23]。

相模川の支流、目久尻川の最上流域に位置する座間市の(45)栗原中丸遺跡第Ⅳ文化層（Ｌ１Ｈ下部)。同じく相模川の支流、引地川中流域に位置する藤沢市(46)南鍛冶山遺跡遺物集中0401（Ｌ１Ｓ～Ｂ１)、大和市(47)福田丙二ノ区遺跡第Ⅱ文化層（Ｂ１下部）の10遺跡、12地点／文化層を対象とした。

多摩丘陵は、多摩ニュータウン遺跡群があるが、ここでは町田市(48)向遺跡を対象とした。

以上の45遺跡48地点／文化層を対象に分析を行う。



第１図　分析対象遺跡分布図

2．地域区分

屋渕遺跡の報告の中で、砂川期の遺跡が幾つかの小グループに細分できるのではないかと考え、そのアイデアをもとにシンポジウム『砂川―その石器群と地域性』の中で「「砂川」の空間的枠組みをめぐって」として発表要旨にまとめた。

旧石器時代は遊動生活をしており、関東地域程度の範囲は常に巡回する範囲内で、季節などによって中部高地を含めた広範囲移動を繰り返していたという考えが趨勢であるように思える。そうした視点から、筆者がシンポジウムで行ったような小地域区分は、一つの生活圏、行動の一通過点を無意味に区分するだけの徒労に思われるかもしれない。しかし、考古学的手法として、発掘資料をもとに検討するのであれば、それら資料に対し現在の我々がなぜ幾つかの似たものと、似てないものにグルーピングできのは何故かという問題に立ち返るべきであり、また、幾つかの小地域に見えたとして、それを集団の違いと解釈し、抽象的な議論を展開するのは、前者の考えを裏返すだけである。本稿の目的はそこにあるわけではなく、あくまで、当該地域の砂川期の遺跡のあり方をみることが目的である。

シンポジウムでは石材組成を中心に尖頭器／先刃掻器の共伴、先験的地形区分によって【砂川期：砂川型】【砂川期：武蔵野台地型】【砂川期：栗原中丸型】【砂川期：中村型】【砂川期：多摩丘陵型】【砂川期：大宮台地型】の６グループとした。今回この区分に先立ち、再度地形による台地／丘陵を単位に、遺跡分布図（第１図）をみながら、遺跡レベル（石器集中の数、礫群の有無及びその数、配石等の有無、石器の総点数、ナイフ形石器の数）の検討を進める。

なお、地形区分で注意されるのは、現在の景観と砂川期の景観では、かなり異なっていたことである。砂川の時期(註24)は、海洋酸素同位体によるステージ２の最終氷期最盛期にあたり、海面低下によって東京湾が陸地化しており、中川低地、荒川低地、多摩川低地とも現在の河川面より数十メートルも深く、大宮台地、武蔵野台地、相模野台地はそれどれ渓谷によって分断されるような景観であったと想定される。そのことによって、人々の行動にどのような制限が加えられたかは不明であるが、現在の台地より、視覚的にメリハリのある単位であったと考えられる。

［大宮台地］

大宮台地は、ローム層の堆積が薄いため砂川期の石器群の殆どはソフトローム層中から出土（西井　1996a）している。調査時に気がつかずに取り上げていまし、報告書にナイフ形石器等が掲載されている場合も見受けられる。

分析対象とした８遺跡を検討する（表１）。石器集中が複数ヶ所になるのは、在家遺跡の10ヶ所と叺原遺跡の９ヶ所のみで、他は１～２ヶ所と少ない。また、在家遺跡に関しては砂川期以外の石器群が混じっているように思われるので、確実なのは叺原遺跡だけだといえる。礫群は当該地域では伴っていない。

石器総点数は、石器集中の数と連動して叺原遺跡が1,513点と他の遺跡より一桁多い。他に点数がまとまっているのは、提灯木山遺跡の365点でナイフ形石器も28点ある。なお、宮代町前原遺跡と久保山遺跡は黒耀石を用いた石器製作に関わる遺跡で、点数の多くは剥片類と砕片である。特に宮代町前原遺跡の約800点の殆どは微細な砕片で占められている。

当該地域で用いられている石器石材は、遺跡の規模が小さいことと関連するのか、遺跡ごとの偏在が大きい。宮代町前原遺跡と久保山遺跡は黒耀石がほぼ100％を占め、前戸崎遺跡はチャートが81％を占めている。叺原遺跡と提灯木山遺跡は規模が大きくなるため、複数の石材が使われている。叺原遺跡は頁岩系が50％を占め主石材(註25)となっているが、それ以外にチャート27％、安山岩５％が用いられ、提灯木山遺跡では、安山岩34％とチャート28％を中心に砂岩13％、ホルンフェルス、頁岩系が５％使われている。

［入間台地／加治丘陵］

入間台地は、４遺跡を分析対象とした（表１）。石器集中は西久保遺跡の６ヵ所が多く、他は１～３ヵ所で、礫群は大宮台地と同じく伴わない。西久保遺跡は、石器総点数が2,277点でナイフ形石器33点と石器組成は充実しており、当該地域の中心的な遺跡といえる。屋渕遺跡と坂東山遺跡は西久保遺跡と等距離に位置し、石器集中が１ヶ所であるが、ナイフ形石器が12、14点とまとまっており近似した様相を呈している。石材組成をみると、この３遺跡はチャートを主石材に用いており、それぞれ87、90、98％を占めている。また、黒耀石が殆ど出土していない点も共通する。一方、北東に少し離れる富士見一丁目遺跡は、黒耀石が全体の98％を占めており大きく様相をことにしている、また、富士見一丁目遺跡では上ヶ屋型彫器がまとまって出土している点も注目される。

［武蔵野台地］

武蔵野台地で分析対象とした遺跡は、18遺跡19地点／文化層である（表１）。武蔵野台地は遺跡数も多く、分布の状況から幾つかのグループに分けて検討する。

ａ）武蔵野台地北西部、入間川流域

まず、砂川遺跡を中心に狭山丘陵の北部に分布する城の腰遺跡、宮林遺跡、砂川遺跡、中砂遺跡の４遺跡を取り上げる。

当該地域は、入間台地の富士見一丁目遺跡を除いた、鶴ヶ丘遺跡Ｃ区、西久保遺跡、屋渕遺跡、坂東山遺跡と約５㎞の範囲にまとまり、遺跡群を形成している。しかし、石器集中は４～６ヶ所を数え石器総点数、ナイフ形石器ともに入間台地の約２倍の規模である。また、各遺跡で礫群が小規模であるが伴っている。石器石材はチャートを主石材とする点は共通するが、城の腰遺跡はチャート60％に対し黒耀石38％、宮林遺跡はチャート56％に対し頁岩系が30％、ホルンフェルス９％、黒耀石１％、砂川遺跡はチャート65％に対し凝灰岩27％、黒耀石１％が用いられている。入間川を挟んでチャートを主石材に近似したナイフ形石器がみられる地域であるが、遺跡の規模等、石器石材に違いもみられる。

ｂ）石神井川流域を中心として

遺跡分布（第１図）をみると、武蔵野台地東部中央に遺跡の密集区がある。南側に野川流域の遺跡が並び、北西側に目黒川流域の多聞寺前遺跡、白子川流域の東丸山遺跡がある。石神井川の富士見池と神田川源流の井の頭池周辺の約３㎞の範囲に８遺跡が密集している。

石器集中は天祖神社東遺跡14ヶ所、葛原遺跡15ヶ所と二桁である。その他の遺跡も、地蔵坂遺跡を除くと数ヶ所の石器集中が検出されている。なお、前原遺跡と吉祥寺南町１丁目遺跡では石器集中の区分がされていないが、遺物分布図をみるとかなりの石器集中が密集していることがわかる。

また、御殿山遺跡は径約10mの範囲に遺物が密集しており、多くの石器集中が同一地点で重複していると思われる。

礫群は各遺跡で伴うが、特に葛原遺跡で石器集中の２倍以上の数が検出されている。

石器点数は、井の頭池遺跡群の吉祥寺南町三丁目遺跡は総点数3,665点、ナイフ形石器301点と非常にまとまっている。同じ遺跡群の御殿山遺跡においても総点数1,669点、ナイフ形石器64点と多く、当該地域が一つの中核的な遺跡と考えられる。石神井川流域は、天祖神社東遺跡から総点数2,792点、ナイフ形石器72点。葛原遺跡は総点数1,330点、ナイフ形石器81点を数える。

石材組成は、入間川流域の遺跡群のようにチャートを主石材とするような地域的特性はみられず、逆に多様な石材が使われている。個別にみると武蔵関遺跡はホルンフェルスが主石材で69％を占め、他はチャート25％、黒耀石４％。天祖神社東遺跡は黒耀石が主石材で52％、ホルンフェルス28％、チャート15％と続いている。葛原遺跡は報告書に石材組成が明記されていないが、チャートを主に黒耀石等が用いられているようである。武蔵関北遺跡は主石材が黒耀石で66％を占め、他は黒色頁岩19％、メノウ８％と続く。稲荷原遺跡は硬／珪質頁岩（報告書では頁岩とだけ記載されているが、巻頭写真を見る限り良質な硬／珪質頁岩である）が主石材で77％を占め、他に黒耀石が21％用いられている。地蔵坂遺跡と吉祥南町三丁目遺跡、御殿山遺跡は半分を占める主石材はみられない。地蔵坂遺跡はチャート34％、粘板岩22％、頁岩系15％、凝灰岩11％。御殿山遺跡はチャート20％、頁岩系18％、黒耀石13％、凝灰岩12％。吉祥南町三丁目遺跡は黒耀石41％、凝灰岩20％、頁岩系15％、チャート11％と複数の石材が多量に用いられていることがわかる。

本地域の石器石材の特徴は、各遺跡とも黒耀石が一定量を占める、他にも遠隔地石材と思われる硬／珪質頁岩等が集中的に利用されている遺跡がみられる。また、吉祥寺南町三丁目遺跡から相模川産と思われる凝灰岩がまとまって出土しており、相模野台地との関連性も注意させる。地理的には武蔵野台地東部は石材採集地点と距離があり、かえって入間川流域のほうが採集地に近いように思えるが、石材組成をみる限り逆で、入間川流域のほうはチャート等の在地石材に依存し、当該地域のほうが遠隔地石材を多用している。

ｃ）野川流域

野川流域は研究史的に重要な位置を占める遺跡が多いが、今回は上流域の日影山遺跡、中流域の前原遺跡、下流域の廻沢北遺跡の３遺跡４地点／文化層を対象とした。

野川上流域の日影山遺跡は、層位による若干の差と、遺物分布、石材、ナイフ形石器の形態等からブロックⅠ群とブロックⅡ群に分離し、ブロックⅠ群をナイフ形石器の終末期に位置付け、ブロックⅡ群を砂川期としている。以後ブロックⅡ群を検討する。石器集中15ヶ所に対し礫群20基が検出された。石器の総点数は785点でナイフ形石器は55点出土している。本遺跡に関しては隣接地を東京都埋蔵文化財センターが調査し、当該期の遺跡の広がりを確認していることから、かなりの規模の遺跡になると想定される。中流域の前原遺跡は総点数299点、ナイフ形石器41点が検出されている。下流域の廻沢北遺跡は総点数308点、ナイフ形石器16点が出土している。

石器石材は、日影山遺跡ブロックⅡ群は硬／珪質頁岩が34％で最も多く、次いで黒耀石28％、チャート15％の順となり、いわゆる遠隔地石材が占める割合が高い。前原遺跡は粘板岩が71％と主石

材であるが、粘板岩という呼称は現在あまり使われておらず、黒色頁岩と≒の関係で置換されると思われるが、実資料の検討をおこなっていない。頁岩系が主体を占めていると思われる。廻沢北遺跡は概報であるため全体の組成はわからないが、硬／珪質頁岩（報告書では珪岩と記載されているが、実見した際の記憶では良質な硬／珪質頁岩であったと覚えている）の大形のナイフ形石器が出土している。

以上、武蔵野台地の砂川期の遺跡を概観したが、入間川流域や次に検討する相模野台地と異なり、いわゆる遠隔地石材が多用される遺跡がある。特に国武氏が指摘しているように高稲荷遺跡、日影山遺跡ブロックⅡ群、廻沢北遺跡で硬／珪質頁岩を用いた大形のナイフ形石器がみられる点は注目される（国武　2000）。

［相模野台地／多摩丘陵］

a）丹沢山地

宮ヶ瀬遺跡群は中津川とその支流が形成する河岸段丘上に立地する遺跡群で、宮ヶ瀬地区と落合地区に区分される。中原遺跡、上原遺跡、サザランケ遺跡は全て落合地区に位置する。落合地区は早戸川西岸の高位段丘が連続して分布する地域で、それぞれの遺跡は沢によって分断されているが、隣接している。中原遺跡は石器集中４ヵ所と配石４基、炉跡１ヵ所が検出されている。石器の総点数は260点出土しているが、製品はナイフ形石器の未製品１点と尖頭器１点、楔形石器、礫器類だけである。たま、尖頭器は製作段階の調整剥片とされているが、小形薄手の剥片で、尖頭器の共伴の確証に弱いように思える。上原遺跡は中原遺跡とサザランケ遺跡に挟まれた真中に位置し、遺跡の規模等から宮ヶ瀬遺跡群の砂川期の中心的遺跡である。石器集中は36ヶ所、礫群９基、配石12基、炉跡３ヶ所が検出され、石器の総点数は2,137点を数え、ナイフ形石器は129点出土している。サザランケ遺跡は石器集中４ヵ所と配石１基で、礫群は検出されていない。石器の総点数592点、ナイフ形石器28点が検出された。

石器石材は、中原遺跡は黒色ガラス質安山岩が主石材で76％を占め、次に凝灰岩が20％である。上原遺跡は凝灰岩が88％と圧倒的に占めており、他は黒耀石が８％である。サザランケ遺跡は上原遺跡ほどではないが凝灰岩が60％と主石材で、次いで黒耀石29％、チャート５％となっている。近接する３遺跡で、石材消費のあり方が異なっている。遺跡立地から凝灰岩の使用頻度が高いのは想定できるが、黒色ガラス質安山岩、黒耀石と遠隔地又は流域を異にする石材が一定量使用されており、特に中原遺跡では黒色ガラス質安山岩が主石材になっている。それに対し、相模川上流域の遺跡で多用されているチャートが殆ど使われていない点は注意される。

b）相模川流域

相模川及び支流の目久尻川、引地川流域は砂川期の遺跡が多く、10遺跡12地点／文化層を対象に検討する。（表１）

石器集中と礫群を相模川上流域から順次概観する。遺跡分布図（第１図）をみると橋本遺跡は上流域に位置し、遺跡の密集する大和市周辺の遺跡から北側に離れている。橋本遺跡は石器集中が明記されていないが、遺物分布図を見る限り、調査区の東側に等高線に直行するように多くの集中部がみられる。また、石器集中と重複するように礫群10基と炭化物片の集中が検出されている。石器

の総点数は2,608点、ナイフ形石器179点出土している。

中流域（大和市周辺）の遺跡は、下森鹿島遺跡は石器集中16ヵ所、礫群10基で石器総点数498点、ナイフ形石器40点出土している。中村遺跡は谷を挟んでC区とD～F区に分かれている。C区は石器集中22ヶ所、礫群７基で石器総点数1,290点、ナイフ形石器134点。D～F区は石器集中21ヶ所、礫群９基、石器の総点数706点、ナイフ形石器86点である。長堀南遺跡は石器集中16ヵ所、礫群26基で石器の総点数4,672点、ナイフ形石器254点出土している。石器の総点数では、今回分析対象とした遺跡で最大規模である。また、ナイフ形石器の点数は吉祥寺南町一丁目遺跡に次ぐ数である。当該地域の砂川期の遺跡は、規模の大きい遺跡が多いが、その中でも中心的遺跡であるといえる。長堀北遺跡は石器集中４ヵ所、礫群12基、石器の総点数は470点とあまり多くないが、ナイフ形石器が58点出土しており、石器総点数に比較してナイフ形石器の点数が多い。長堀南遺跡は砂川期の石器群が２枚の文化層に区分されている。第Ⅳ文化層は石器集中27ヶ所、礫群23基、石器の総点数1,800点、ナイフ形石器127点。第Ⅴ文化層は石器集中４ヵ所、礫群１基、石器の総点数277点、ナイフ形石器20点である。深見諏訪山遺跡は石器集中３ヶ所、礫群２基、石器の総点数270点、ナイフ形石器22点と資料数はそれほどでもないが、尖頭器７点とそれに伴う削片等が出土している点は注意される。栗原中丸遺跡は、目久尻川上流域で大和市周辺の遺跡群からは、やや西側に離れている。石器集中56ヶ所、礫群37基、石器の総点数3,431点、ナイフ形石器219点出土しており、下鶴間長堀遺跡と共に当該地域の中心的遺跡である。福田丙二ノ区遺跡は大和市に所在するが、河川流域は相模川でなく、その支流の引地川上流域に位置している。石器集中は14ヶ所で礫群は検出されていない。石器の総点数は643点、ナイフ形石器57点出土している。南鍛冶山遺跡は引地川下流域に位置する。石器集中は１ヵ所で礫群が１基伴っている。石器の総点数は647点でナイフ形石器57点出土している。引地川の２遺跡から尖頭器が出土していない点は注意される。

石器石材は、橋本遺跡は全体の50％を越える主石材はないが、チャートが49％を占め黒耀石11％、凝灰岩９％である。宮ヶ瀬遺跡群が凝灰岩を主石材としチャートを殆ど用いていないのとは、正反対で凝灰岩の比率が低い、一方で黒耀石が一定量用いられている点は共通している。下森鹿島遺跡の主石材はチャートの53％、次いで凝灰岩18％、砂岩９％、黒耀石５％である。中村遺跡C区ではチャートが最も多く41％、次いで凝灰岩20％、粘板岩19％、黒耀石５％となっている。D～F区ではチャートよりも黒耀石が多く48％、次いでチャート37％、粘板岩10％の順となり、凝灰岩がまったく使われていない。谷を挟んで近接する２地点の遺跡で、石材の異なった嗜好性がみられる点等から、時期差とも考えられる。下鶴間長堀遺跡は凝灰岩45％、粘板岩29％と多く、次いでチャート12％、黒耀石10％が使われている。栗原中丸遺跡は主石材が凝灰岩で52％を占め、次いで粘板岩22％、黒耀石18％、チャート３％となっている。下鶴間長堀遺跡と栗原中丸遺跡は調査時点での石材分類が見直され、他の石材の一部が凝灰岩に再分類されている。そのことを考慮すると凝灰岩の比率はもっと高いといえそうである。長堀北遺跡の主石材は凝灰岩の80％で、次いで粘板岩８％、黒耀石５％、チャート４％の順である。長堀南遺跡第Ⅳ文化層は泥岩／珪質泥岩／泥質珪岩を合わせると37％を占め、次いでチャート27％、凝灰岩10％、黒耀石５％となっている。長堀南遺跡第Ⅴ文化層は第Ⅳ文化層と比べてチャートの比率が40％と高くなるが、泥岩／珪質泥岩／泥質珪岩を合

わせると30％になる。黒耀石の５％は第Ⅳ文化層と同じであるが凝灰岩は４％と低くなる。泥岩／珪質泥岩／泥質珪岩は他の報告書であまり使われない呼称であるが、頁岩系と理解すると、福田丙二ノ区遺跡とも関連して興味深い。福田丙二ノ区遺跡は凝灰岩44％が最も多く、次いで黒耀石21％、頁岩系22％の順である。本遺跡の特徴として頁岩系の石材が多く用いられている。南鍛冶山遺跡は、殆どが黒耀石で占められており、当該地域としては特異な存在である。

以上、相模川及び支流の目久尻川、引地川流域の遺跡を概観した。石材の嗜好性によって大きく２グループに分けられる。まず、主にチャートを用いる一群で、遺跡分布は中流域から上流域にまとまっている。次に凝灰岩を主体とする一群で中流域から目久尻川、引地川の上流部に分布している。しかし、大和市周辺の約径３㎞の狭い範囲に遺跡が密集するなかで、地図上に明確な区分線を引くことは難しい。便宜的に前者をグループａ、後者をグループｂとして検討する。また、少ないが黒耀石が主体を占める遺跡があり、グループｃとしておく。

グループａ：チャートを主に用いる遺跡：橋本遺跡、下森鹿島遺跡、中村遺跡Ｃ区、長堀南遺跡第Ⅳ／Ⅴ文化層、深見諏訪山遺跡

橋本遺跡以外は、相模川中流域の大和市周辺に分布している。相模川流域の遺跡の印象として凝灰岩を多用しているように思えるが、意外とチャートを多用する遺跡が多い。やや下流側に離れる深見諏訪山遺跡においても、石材組成表は掲載されていないが「相模野台地の当該期石器群の多くは、細粒凝灰岩を多用する傾向があるが、本文化層では、チャートが比較的多く用いられている」（諏訪間・堤　1985）と指摘されている。しかし、チャートが全体の半分以上を占める遺跡は下森鹿島遺跡だけで、凝灰岩と黒耀石が一定量用いられている。

グループｂ：凝灰岩を主体とする遺跡：下鶴間長堀遺跡、長堀北遺跡、栗原中丸遺跡、福田丙二ノ区遺跡

下鶴間長堀遺跡と長堀北遺跡は相模川流域であるが、栗原中丸遺跡と福田丙二ノ区遺跡は支流に分布している。近年石材名称の再検討がおこなわれており、凝灰岩の占める割合は相対的に上がる可能関が高いが、ここでは報告書の記載を使用している。相模川流域の下鶴間長堀遺跡と長堀北遺跡は凝灰岩の占める割合が45％と80％である。チャートを主体とする遺跡が多様な石材を一定量もちいているのに対し、凝灰岩を主石材とする２遺跡は、黒耀石の割合５～10％とグループａに近似するが、一方でチャートの利用は少ない。

栗原中丸遺跡は下鶴間長堀遺跡と似た傾向を示すが、福田丙二ノ区遺跡は頁岩系の石材が22％占め、尖頭器の共伴が無いなど、個別の検討が必要である。

グループｃ：黒耀石を主体とする遺跡：中村遺跡Ｄ～Ｆ区、南鍛冶山遺跡

本グループはグループａ/ｂと同列には考えられない。中村遺跡Ｄ～Ｆ区は黒耀石が48％を占めるが、チャートも37％用いられておりグループａに含めて検討するほうが妥当かもしれない。南鍛冶山遺跡は黒耀石だけを用いる遺跡で、本蓼川遺跡と近似している。編年的問題もあるが、入間川流域の富士見一丁目遺跡と合わせて、砂川期の遺跡がまとまる地域から少し離れた地点にこのような遺跡が立地するのは興味深い。また、南鍛冶山遺跡／富士見一丁目遺跡とも黒耀石を多用する為か、ナイフ形石器が小形で幅狭の傾向がある、宮ヶ瀬遺跡群の上原遺跡とも合わせて、ナイフ形石器の

項目で検討したい。

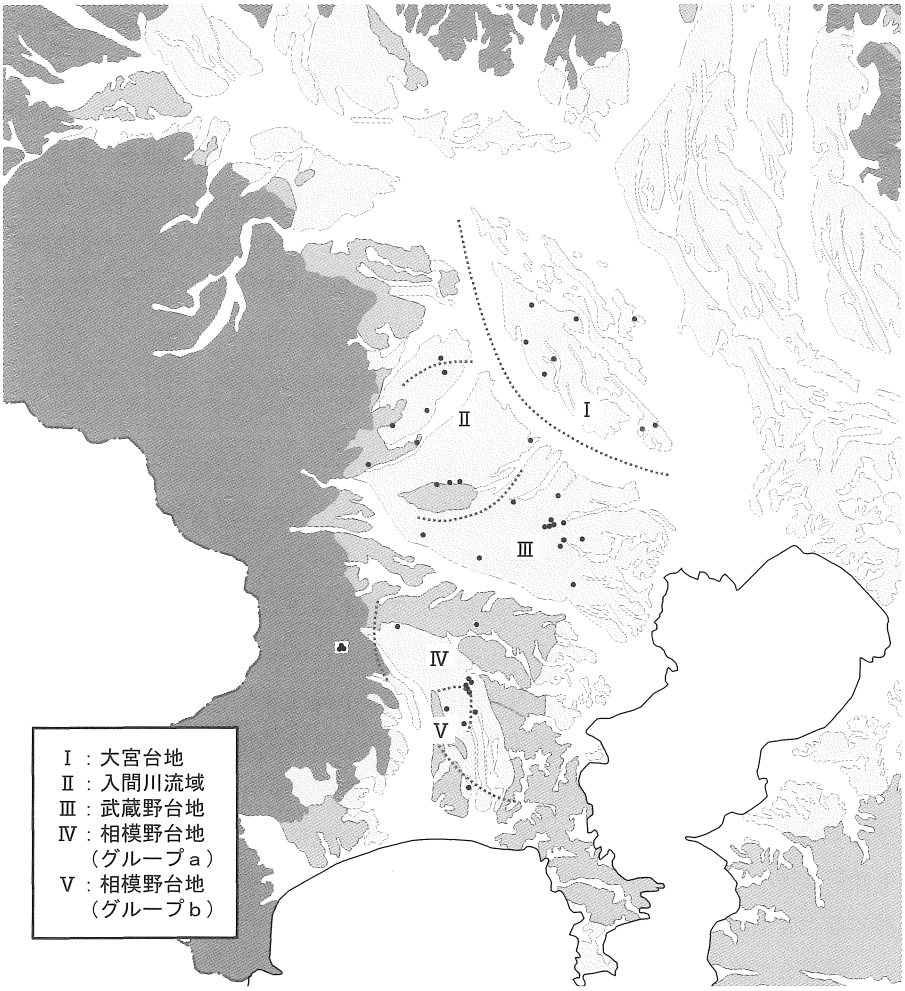
c）多摩丘陵

多摩丘陵は、多摩ニュータウンと港北ニュータウンによって精緻な調査が実施され多くの遺跡が確認されている。三瓶氏の集成（三瓶　2000）によると36遺跡になるが、今回検討対象としたのは向遺跡のみである。

向遺跡からは石器集中21ヶ所と礫群19基が検出され、石器の総点数は631点、ナイフ形石器は66点出土している。石材組成はチャートが51％を占め、次いで粘板岩20％、黒耀石19％となっている。黒耀石製の尖頭器も出土しており、相模野台地グループａと同じ傾向である。

以上、各地域単位で概観したが、次に全体の整理を行い、シンポジウムでおこなった地域区分と合わせて検討する。

まず始めに、シンポジウムで行った地域区分【砂川期：大宮台地型】【砂川期：砂川型】【砂川期：武蔵野台地型】【砂川期：中村型】【砂川期：栗原中丸型】【砂川期：中村型】【砂川期：多摩丘陵型】



第２図　地域区分図

と、上記で概観してきた各台地と比較すると、【砂川期：大宮台地型】は大宮台地の８遺跡。【砂川期：砂川型】は入間川流域の遺跡で、入間台地の富士見一丁目遺跡を除いた３遺跡と加治丘陵の坂東山遺跡、武蔵野台地北西部の４遺跡。【砂川期：武蔵野台地型】は武蔵野台地の13遺跡、打越遺跡第２地点を含めるかは保留。【砂川期：中村型】と【砂川期：栗原中丸型】は相模野台地の９遺跡、11地点／文化層である。前者をグループａ、後者をグループｂに対応する。【砂川期：多摩丘陵型】は多摩丘陵の遺跡で、向遺跡のみを対象とした。この区分に含まれない遺跡として、【砂川期：砂川型】に近接して黒耀石を多用する富士見一丁目遺跡、【砂川期：栗原中丸型】に近接して黒耀石を多用する南鍛冶山遺跡と宮ヶ瀬遺跡群が挙げられる。

シンポジウムの要旨では、説明不足もあり筆者が意図したものとやや異なる形になった観もある。また、地域区分で最も偏在が数値化しやすい石材組成をベースに、グルーピングをし、【砂川期：大宮台地型】と【砂川期：多摩丘陵型】は内容の検討より地形区分で遺跡の枠入れを行った。あえてレベルの異なる要素による区分をおこなったのは、固定的なグルーピングが目的ではなく、分析対象（要素／視点）が変われば、異なるグルーピングが可能になり、それによって観えてくるものを検討したいと考えたからである。最初に最小の単位が求められれば、次に再区分に便利かと思ったが、結果は細分の方向のみが目立ち、このグルーピングが固定的区分として捉えられる危険を感じた。再度田中氏の「砂川型式を武蔵野台地を中心とした小地域に限定しようとする方向性である。（中略）資料数の多い関東地方の石器群にとらわれすぎている点である。他地域のなかに武蔵野台地と同じ特徴が認められた場合、それをどのように位置付けるのか」（田中　1997）と言う批判が出そうであるが、筆者の意図は、固定的な区分をおこなうことが目的ではなく、分析対象（要素／視点）によって多重的な区分線が引けるのはなぜかということの検討であり、平面的に検討されてきた各要素を立体的に配置するための模索である。また、遊動生活というキーワードによって、広範囲な移動を繰り返していたとするイメージと、実際の報告書作成過程で感じる印象の違いを明確にすることでもあった。

次に、遺跡の規模を石器集中の数と石器の総点数をみてきたが、石器集中の区分は当然主観が入り各報告者によって区分の基準が変わる可能性がある。また、石器の総点数も黒耀石製の石器製作の場所を調査すると、微細な砕片が多量に検出され、まとまった資料のように思えてしまうが、ナイフ形石器の点数と合わせることで、一つの傾向として捉えることが可能であると考える。また、礫群の有無とその数が予想以上に地域によって偏在があることが明らかになった。

大宮台地は叺原遺跡を除くと、石器集中及び石器点数も小規模なものが多く、礫群が伴う遺跡は無かった。入間台地と加治丘陵は、西久保遺跡で石器集中、石器総数共に突出し中心的な遺跡である以外は、石器集中１ヶ所、石器点数も２～300点程度の遺跡が多い、しかし、ナイフ形石器に関しては各遺跡で10点以上出土しており、大宮台地と比べると規模のわりに充実した内容といえる。入間台地も礫群は検出されていない。武蔵野台地北西部、狭山丘陵付近は入間台地／加治丘陵と合わせて【砂川期：砂川型】とした地域であるが、入間川を渡ることによって石器集中、石器点数共に多くなり、礫群も小規模であるが伴うようになる。

武蔵野台地は、遺跡分布から幾つかの小グループがみられる。その中でも石神井川中流域と神田

川源流の井の頭池周辺は一つのエリアとして密集部分がみられる。遺跡も石器集中、石器点数とも多く検出されており礫群を伴う。また、尖頭器が出土した葛原遺跡では石器集中を上回る礫群が検出されている。野川上流域の日影山遺跡ブロックⅡ群も石器集中を上回る礫群検出されている。

相模野台地は石器集中、礫群、石器総点数、ナイフ形石器等で武蔵野台地を上回る規模の遺跡が多くみられる。また、尖頭器が各遺跡で共伴する点も異なっている。丹沢山地の宮ヶ瀬遺跡群では、礫群以外に配石、炉跡が伴い、台地部の遺跡と異なる様相を呈している。

石器石材の嗜好性は、大宮台地は遺跡の規模が小さいためか一つの石材に偏る傾向がある。しかし、石材の種類は武蔵野台地と共通点も多い。入間台地はチャートを主石材に黒耀石が殆どみることがない、いわゆる在地石材のみで構成されている。一方、武蔵野台地北西部では入間台地と共通する傾向であるが、黒耀石が若干増える傾向にある。礫群の有無と合わせて、より小地域での分析が求められるかもしれない。武蔵野台地東部は幾つかのエリアに分かれるが、多様な石材が用いられている点は共通する。また、遠隔地石材として黒耀石、硬／珪質頁岩が使われており注意される。地理的には入間川流域のほうが原産地に近いと思われるが、当該地域で在地石材を嗜好するのに対し、武蔵野台地東部の遺跡では、なぜ遠隔地石材が用いられているのであろうか、それぞれの地域の遺跡群で異なった石材獲得のチャンネルがあると考えられる。

相模野台地は、相模川中流域の大和市周辺の密集区でチャートを主に用いる遺跡と、凝灰岩を主に用いる遺跡が混在している。より上流域に近い遺跡はチャート、相模川の支流及びやや下流域に分布する遺跡に凝灰岩が多く用いられる傾向があるが、遺跡分布をみる限り原因となる有意な要因はみられず、個別の遺跡分析によって検討する必要がある。また、主な石材が異なる以外は、黒耀石が一定量使われている点と、遺跡の規模、尖頭器の有無等に違いはあまりみられないようである。

相模野台地と入間川流域は、主な石材が異なっており遺跡の規模、礫群、石器総点数等々で対照的な地域であるが、在地石材を多用する点では共通している。武蔵野台地は遺跡の規模、礫群の有無等は相模野台地に近いが、尖頭器の有無は入間川流域と同じく伴わない遺跡が多い。しかし、石器石材の嗜好は相模野台地／入間川流域が在地石材を多用するのに対し、いわゆる遠隔地石材が多く用いられている点は大きく異なっている。

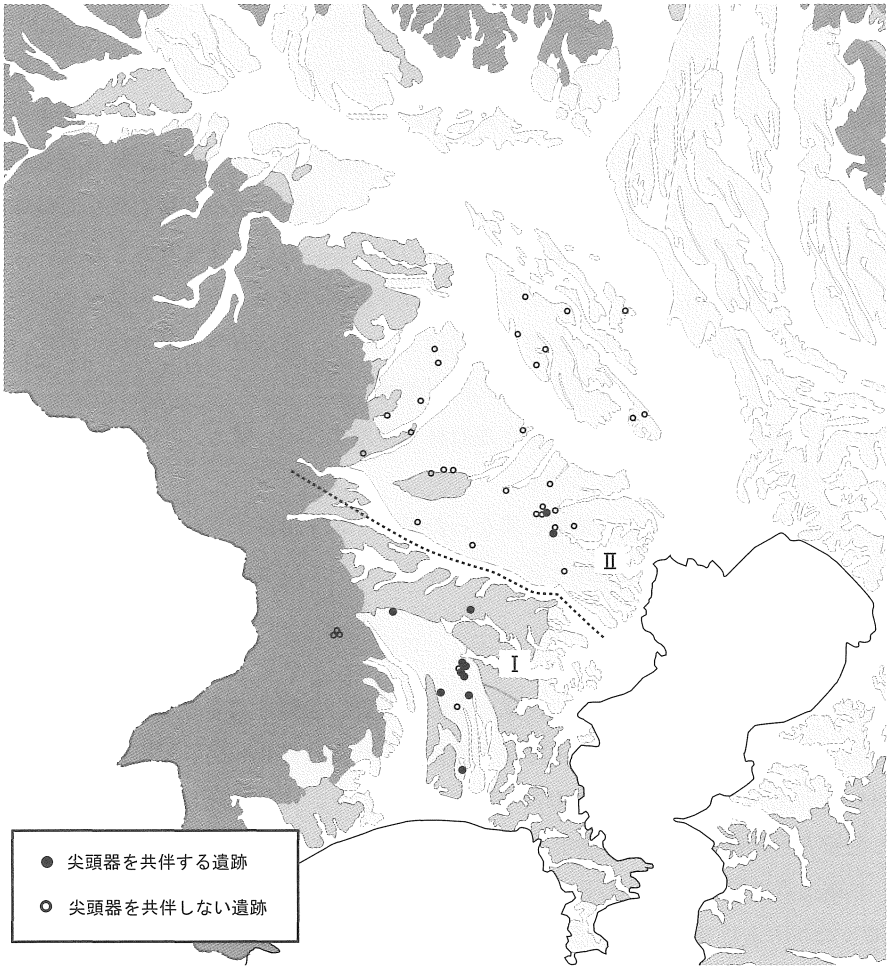
以上検討した地域の周辺に、その地域と異なった傾向を示す遺跡が点在している。黒耀石を多用する富士見一丁目遺跡、南鍛冶山遺跡と宮ヶ瀬遺跡群については改めて検討したい。

3．尖頭器

砂川遺跡第２次調査の報告書の中で、月見野遺跡群と野川遺跡の調査の成果をもとに確立した相模野編年と武蔵野編年のなかに、砂川遺跡が位置付けられ武蔵野Ⅱｂ期と相模野第Ⅳ期とされた。当該期は「いずれも槍先形尖頭器と先刃式の掻器をともなう。これに対して砂川遺跡では、Ａ地点・Ｆ地点とも槍先形尖頭器と掻器の確実な出土例はみられなかった」ことに対する解釈として「たまたまＡ・Ｆ両地点の発掘区域で出土しなかっただけ」又は「槍先形尖頭器や掻器を製作したりあるいは使用したりする作業が行われなかった」と理解している（鈴木　1974）。特に砂川遺跡の周辺表採資料に尖頭器が多くみつかっていることも、前者の考えを補強している。

また、尖頭器石器群の研究の視点から、尖頭器の出現の問題を追及していた白石氏は、岩宿Ⅱ期の角錐状石器から尖頭器への変遷を想定し論理展開をおこなっており、砂川期に尖頭器が伴うことを補強している。一方、ナイフ形石器に比べあまりに少ない尖頭器をどの様に解釈すべきかについては、本蓼川遺跡の報告（宮塚、矢島、鈴木　1974）の中で「構造外的存在」と位置付けるなど、白石氏との間に意見の違いもみられる（白石　1999）。

シンポジウム『ナイフ形石器文化終末期の問題』のコメント「尖頭器の共存について」（田中1980）で田中氏は、尖頭器が共伴するとしている遺跡において、それぞれ異なるレベルで議論されているとし、状況的属性に関して条件を与えている。条件1.いわゆる一遺跡の範囲で認められる場合。条件2.ほぼ同一層位の範囲からひとつの面的まとまりを持って出土した場合。条件3.条件２によって摘出された複数石器の相互が同一石質で成り立っている場合。条件4.条件３によって抽出された複数の石器の相互がさらに同一の母岩や相互の整合関係を持って結び付けられている場合の４つの段階の条件を設定し、条件２を満たす遺跡を分析し、砂川期に尖頭器が伴うのか疑問を提示している。しかし、ここで対象とされた遺跡が武蔵野台地の遺跡に限られており、相模野台地をフィールドとしている研究者から、多くの批判が出された。



第３図　尖頭器

諏訪間・堤両氏は深見諏訪山遺跡の再検討（諏訪間・堤　1985）の中で「最近の調査事例である下鶴間長堀第Ⅲ文化層では槍先形尖頭器とナイフ形石器が同一の個体によって製作されている（中略）槍先形尖頭器については、その存在が石器組成から強引に排除されるのではなく、なぜ少量ながらも共伴するのかが議論されるべき」としている。この論文で、武蔵野台地と相模野台地の状況の違い、砂川期の設定問題に対する指摘があり、尖頭器の共伴に関しては、田中氏の条件４を満たす遺跡の存在で、一応の決着をみたとし、改めてナイフ形石器に比べ尖頭器が少量であるあることの解釈の必要性が述べられている。

その後、増加した相模野台地の良好な資料によって、砂川期に尖頭器が存在することを前提に、中部高地の生産地遺跡と相模野台地の消費地遺跡といったダイナミックな論理展開がなされ、武蔵野台地の尖頭器を伴わない遺跡もその中で解釈されていった(関口　1992、白石　1997、島田　1997)。

しかし、大宮台地及び武蔵野台地北西部において砂川期の遺跡に明確に尖頭器が伴う例は無く、筆者は田中氏の見解を支持する立場で、当該地域の遺跡の整理・報告書の作成に関わってきた。そこで、単純な在る無し論争ではなく、また、共伴することを前提とした“もつ遺跡”と“もたない遺跡”の遺跡構造論的分析でもない視点でみると、はたして関東地方（特に南関東地方）は“同じ”であるのだろうかという素朴な疑問にぶつかった。諏訪間、堤氏も「武蔵野台地では当該期石器群に槍先形尖頭器の共伴は明らかでないものが多い」と述べているが、相模野台地／多摩丘陵と武蔵野台地／入間台地／大宮台地を遺跡レベル、遺物レベルで改めて検討する。

Ⅰ：相模野台地／多摩丘陵

相模野台地及び多摩丘陵の砂川期の遺跡には、尖頭器が多く報告されている。今回分析対象とした14遺跡、16地点／文化層で尖頭器の検出されなかった遺跡は、宮ヶ瀬遺跡群の中原遺跡、上原遺跡、サザランケ遺跡、長堀南遺跡第Ⅴ文化層、南鍛冶山遺跡、福田丙二ノ区遺跡の６遺跡である。一方、尖頭器及びその未製品が検出された遺跡は、橋本遺跡、下森鹿島遺跡、中村遺跡Ｃ区、下鶴間長堀遺跡、長堀北遺跡、長堀南遺跡第Ⅳ文化層、深見諏訪山遺跡、栗原中丸遺跡、向遺跡で中村遺跡Ｄ～Ｆ地点からは尖頭器の未製品が検出されている。尖頭器が共伴した遺跡は10遺跡で、検出されていない遺跡との比は10対６となり、尖頭器を共伴する遺跡のほうが多い。しかし、尖頭器とナイフ形石器の比率の差は大きく、ナイフ形石器1,227点に対し、尖頭器は33点（内未製品と思われるもの、７点）とその割合は３％である。

［検出された尖頭器］

橋本遺跡第Ⅲ文化層から尖頭器２点が検出されている。出土状況は、遺物分布図を見る限り２点とも同一グリッドから出土しており、石器集中部を形成している中に位置している。１は黒耀石製の両面加工の尖頭器で、上半部が欠損しており、樋状剥離の有無は不明である。２は珪岩製の尖頭器で片面・周縁調整が施されている。報告書の実測図をみると、ナイフ形石器と分類されているものの中に、尖頭器と分類してもよさそうなもの（報文４－19－257）が見受けられる。第Ⅱ文化層は涙滴形のナイフ形石器を主体とする石器群で、複数の尖頭器が検出されている。直接樋状剥離を有する尖頭器はみられないが、黒耀石製の削片があり存在を伺わせる。

第２表　相模野台地／多摩丘陵の尖頭器一覧表

No	遺跡名		石材	残存状況	形態	長さ	加工	樋状剥離	備考	報文図版
36	橋本遺跡	1	黒耀石	上半部欠	木葉形	—	両面調整	不明		4-19-739
		2	硅岩		柳葉形	3.2	片面、周縁調整	無		4-19-18
37	下森鹿島遺跡	3	チャート		広葉形	6.0	両面調整	有		104図-1
		4	玄武岩		木葉形	5.1	周縁調整	無		104図-2
		5	チャート		木葉形	4.1	両面調整	無		104図-3
		6	黒耀石		木葉形	4.1	両面調整	無		104図-4
		7	チャート		木葉形	4.2	片面、周縁調整	無		104図-5
38	中村遺跡（C区）	8	黒耀石		木葉形	6.6	両面調整	有	D～F区は尖頭器の未製品のみ、２点出土している。	142図-135
		9	細粒凝灰岩		木葉形	4.3	片面、周縁調整	無		142図-136
		10	細粒凝灰岩	先端欠	木葉形	4.4	片面、周縁調整	無		142図-137
		11	チャート		未製品	5.9	両面調整			142図-138
		12	チャート	下半部欠	未製品	—	両面調整			142図-139
39	中村遺跡(D～F区)	13	粘板岩		未製品	—				233図-86
		14	粘板岩		未製品	4.3				233図-87
40	下鶴間長堀遺跡	15	黒曜石		木葉形	3.7	両面調整	無	17／19／20は調整が粗く未製品の可能性がある。他に未製品２点検出されている。	113図-1
		16	粘板岩	下半分欠	木葉形	—	両面調整	無		113図-2
		17	チャート	下半部欠		—	片面、周縁調整	無		113図-3
		18	チャート	２点接合	木葉形	6.2	両面、周縁調整	無		113図-4
		19	黒耀石		未製品？	5.1	片面、周縁調整			113図-5
		20	黒耀石	先端欠	木葉形	4.6	片面、周縁調整	無		113図-6
		21	チャート	下半部欠	未製品？	—	片面			114図-7
		22	チャート		未製品？	5.2				114図-8
41	長堀北遺跡	23	チャート		木葉形	5.4	両面調整	有		99図-54
		24	チャート	上半部欠	木葉形	—	両面調整	不明		99図-55
42	長堀南遺跡(Ⅳ文)	25	安山岩	基端欠	木葉形	5.1	両面調整	有	第Ⅴ文化層では尖頭器無し。	96図-1
44	深見諏訪山遺跡	26	黒耀石	２点接合	木葉形	6.2	両面加工	有	端部のみが５点、削片も出土している。石器石材は全て黒耀石製。	66図-1/2
		27	黒耀石	２点接合	木葉形	5.6	両面加工	有		66図-3/4
		28	黒耀石		木葉形	5.8	両面加工	無		66図-5
		29	黒耀石		木葉形	4.3	両面加工	無		66図-6
45	栗原中丸遺跡	30	黒耀石	上半部欠	木葉形	—	両面調整	無		90図-1
		31	粘板岩？	上半部欠	木葉形	—	片面調整	有		90図-2
48	向遺跡	32	黒耀石	基部のみ	不明	—	両面加工	不明		53図67
		33	黒耀石	基部のみ	不明	—	両面加工	不明		53図68

下森鹿島遺跡第Ⅲ文化層から、尖頭器５点が検出されている。尖頭器は各石器集中に分散している。石器石材はチャートを主体に玄武岩、黒耀石が用いられており、ナイフ形石器の石材組成と共通する。３は左側縁に樋状剥離がみられるが全体に作りは粗く、この状態で完成品なのか、未製品なのか疑問である。５と６は黒耀石とチャート製であるが、大きさが共に4.1cmで先端を作り出す点が共通する。７は縦長剥片を素材に打面を基端面に残し周縁からの調整加工が施されている。中

村遺跡C区の9と似ている。

中村遺跡C区第Ⅴ文化層は、未製品も含めて5点検出されている。出土状況は、複数の石器集中から出土しているが、「やや限定された状態で分布」(伊藤　1987)しているとされている。8は樋状剥離を有する黒耀石製の両面調整尖頭器である。9と10は縦長剥片を素材に打面を基端面に残す、片面・周縁調整の尖頭器である。10は上半部のみに調整加工が施されており下半部は調整加工を意図していたのか不明である。他に未製品とも思われる両面加工の石器が出土している。ナイフ形石器と尖頭器の共伴問題に関連して、個体別分類を徹底した成果として、ナイフ形石器と尖頭器が同一個体に存在することを下鶴間長堀遺跡に続いて指摘されている。

中村遺跡D～F区第Ⅴ文化層からは、尖頭器の未製品と思われる石器が2点出土している。

下鶴間長堀遺跡第Ⅲ文化層から、尖頭器8点出土している。出土状況は複数の石器集中でナイフ形石器と共に検出されている。尖頭器に用いられている石材は、チャートと黒耀石が主体をなし、全体の石材組成及びナイフ形石器で主体を占める凝灰岩と粘板岩の比率が極端に低い。13は黒耀石製の両面調整尖頭器で小形木葉形を呈している、2点が接合しほぼ完形である。先端部が作り出したかのように成っているが、樋状剥離はみられない。18・20は両面又は片面周縁調整の尖頭器である。大きさは18が6.2cm、20は先端が欠損しており現存では4.6cmであるが、想定では5.5cm程度になると思われ、18、20は形状が近似している。19は調整加工が部分的で21・22と共に未製品の可能性が高いと思われる。個体別分類によって、ナイフ形石器と尖頭器の個体の共有関係が始めて指摘された。

長堀北遺跡Ⅳ文化層からは、樋状剥離を有する尖頭器1点と両面調整の尖頭器の下半部が検出されている。29の樋状剥離を有する尖頭器はチャート製の半両面調整で、外形は樋状剥離のある左側面が緩い弧状を呈し右側縁は中央部でやや下部で屈曲し、左右非対称である。中村遺跡C区の16と比べると両面調整と半両面調整と異なり、大きさが6.6cmに対し5.4cmと小振りになるが外形的には近似している。30は上半部を欠くため樋状剥離の有無は不明である。

長堀南遺跡第Ⅳ文化層から、樋状剥離を有する尖頭器1点が検出された。石材はチャートが用いられており、外形は細身である。

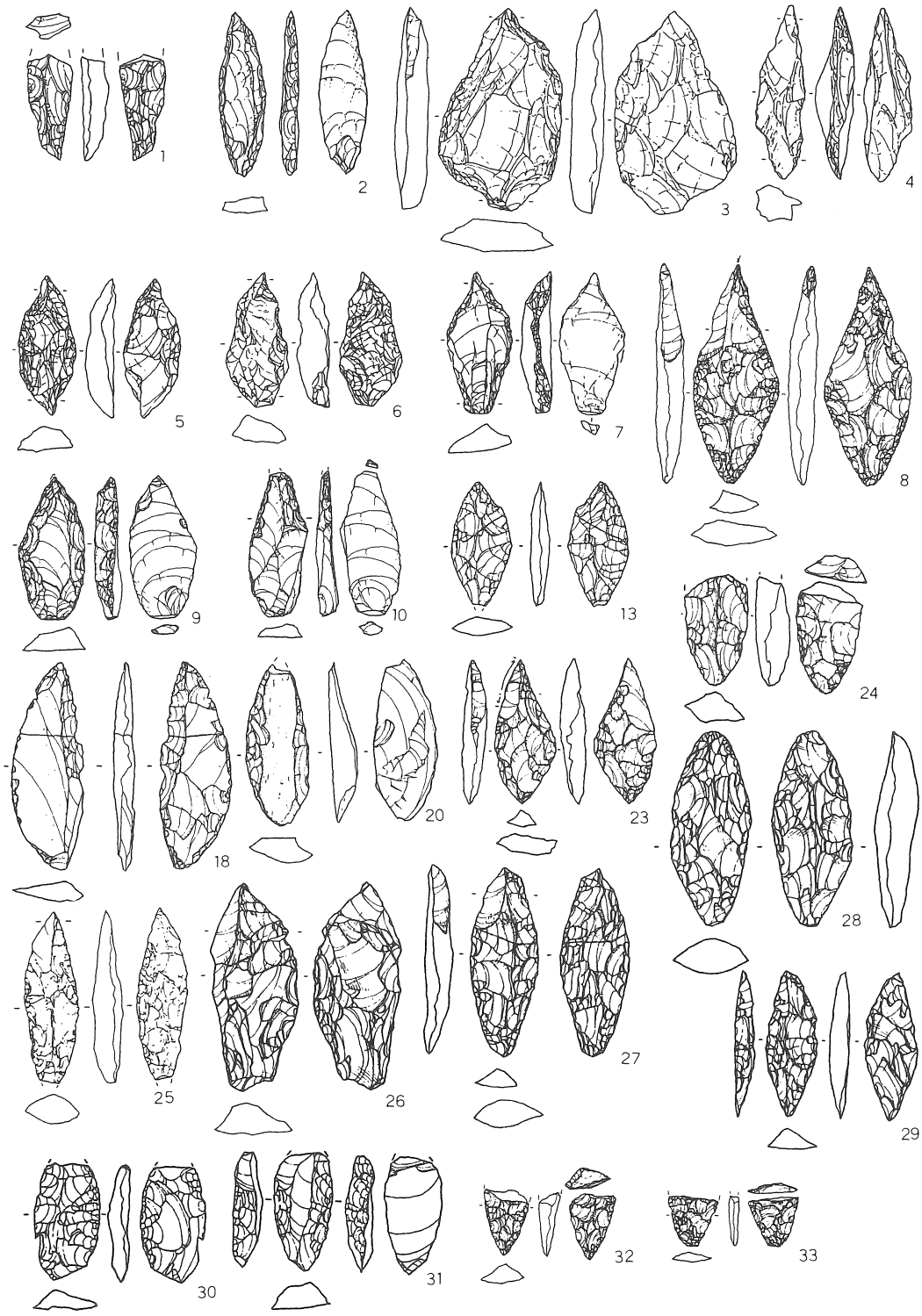
深見諏訪山遺跡第Ⅳ文化層ではら、ナイフ形石器22点に対し尖頭器が7点検出されている、尖頭器が石器に占める割合は22%と他の遺跡と比べと突出している。また、削片等の尖頭器の製作及びメンテナンスに関わる石器が出土しており、ナイフ形石器を主体とする遺跡ではめずらしい。26、27、29の尖頭器は黒耀石製の両面調整で樋状剥離が施されている。28には樋状剥離がみられないが、先端を丸く整形されており、樋状剥離が施される前段階の状態である(国武　2001)。

栗原中丸遺跡第Ⅴ文化層から尖頭器2点検出されている。出土状況は、離れた2つの石器集中からそれぞれ1点検出されている。2点とも先端部を欠損している。石材は黒耀石製と粘板岩?製で、樋状剥離は粘板岩?製のものにみられる。

向遺跡から尖頭器の基部破片2点出土しているが、全体の形状は不明である。

以上、相模野台地の砂川期の尖頭器をみたが、気づいた点を整理しておく。

相模野台地の砂川期の遺跡では、ナイフ形石器に比べて尖頭器点数は少なく、製作及びメンテナ



第４図　相模野台地／多摩丘陵出土の尖頭器

ンスの痕跡がみられない遺跡が多い。その中で例外的存在である深見諏訪山遺跡は、ナイフ形石器22点に対し尖頭器が7点とまとまり、削片等の製作痕跡が明確である。

次に、各遺跡から出土した尖頭器の形態をみると、樋状剥離を有する尖頭器と、周縁調整の尖頭器、両面調整の尖頭器がみられ、それぞれが組み合わさるかたちで組成している。石器石材は、黒耀石が主体を占めているというイメージであったが、思ったよりチャート等が多く、また樋状剥離を有する尖頭器もチャート、安山岩等が用いられている。橋本遺跡第Ⅱ文化層から、黒耀石製の削片が出土しおり、樋状剥離を有する尖頭器が当該期のみに限定されるのでなく時期幅が想定される（栗原　2000、島立　2001）。

［尖頭器を共伴しない遺跡］

尖頭器が出土した遺跡は相模川中流域、特に大和市周辺に多くまとまるのに対し、その周辺に位置する南鍛冶山遺跡と宮ヶ瀬遺跡群からは尖頭器の共伴はみられない。また、大和市周辺でも福田丙二ノ区遺跡は第Ⅰ文化層の涙滴形ナイフ形石器に伴って尖頭器が複数出土しているが、砂川期に相当する第Ⅱ文化層中のからは尖頭器の出土はみない。他の遺跡と比べ、礫群の伴わない点は注意されるが、石材組成等は当該地域の他遺跡と共通しており、たまたま、尖頭器が伴わなかっただけとも考えられるが、ナイフ形石器等の検討が必要である。

南鍛冶山遺跡は石器集中1ヶ所と資料的制約があるが、石器の総点数1084点、ナイフ形石器81点と資料的に充実しており、用いられている石材の全てが黒耀石と特徴的である。本遺跡に近い資料として本蓼川遺跡が挙げされるが、本蓼川遺跡には尖頭器が伴っており、今後検討が必要である。

宮ヶ瀬遺跡群の中原遺跡、上原遺跡、サザランケ遺跡の3遺跡からは、中原遺跡の尖頭器製作過程の調整剥片と思われる1点を除くと、尖頭器の共伴はみられない。上記の項でも述べたが、石器石材で、立地的特異性から凝灰岩の使用頻度が高いのは想定できるが、遠隔石材の黒耀石がどの遺跡でも一定量利用されており、また、伊豆・箱根付近の黒色ガラス質安山岩が中原遺跡で集中的に利用されている中で、チャートが殆ど利用されていない。距離的に近い、橋本遺跡等の相模川流域上流域の遺跡は、尖頭器が共伴する場合が多く、主石材にチャートが用いられている点を考えると注意される。

Ⅱ：武蔵野台地／入間台地／大宮台地

［武蔵野台地］

武蔵野台地で尖頭器が伴う遺跡は、石神井川中流域の武蔵野関遺跡、葛原遺跡B地点第Ⅰ／Ⅱ文化層、武蔵関北遺跡第Ⅱ文化層と神田川の水源に位置する井の頭池遺跡群の御殿山遺跡Ⅳ層上部と比較的近接した地域にまとまる傾向がみられる。

武蔵関遺跡は、Ⅲ層下部からⅣ層上面にかけて石器が出土している。尖頭器の出土状況は、調査区の北東部の石器集中にまとまっており、大形両面調整尖頭器は下半部を欠き尚且つ3つに破損した状態で近接して検出されている。1は木葉形の両面調整尖頭器で、両端を欠損するため樋状剥離の有無は不明である。大形両面調整の尖頭器は、本遺跡の石材組成がホルンフェルスを主に、チャートと黒耀石が少量に用いられているのに対し、頁岩と異質である。また、砂川期にこのような大

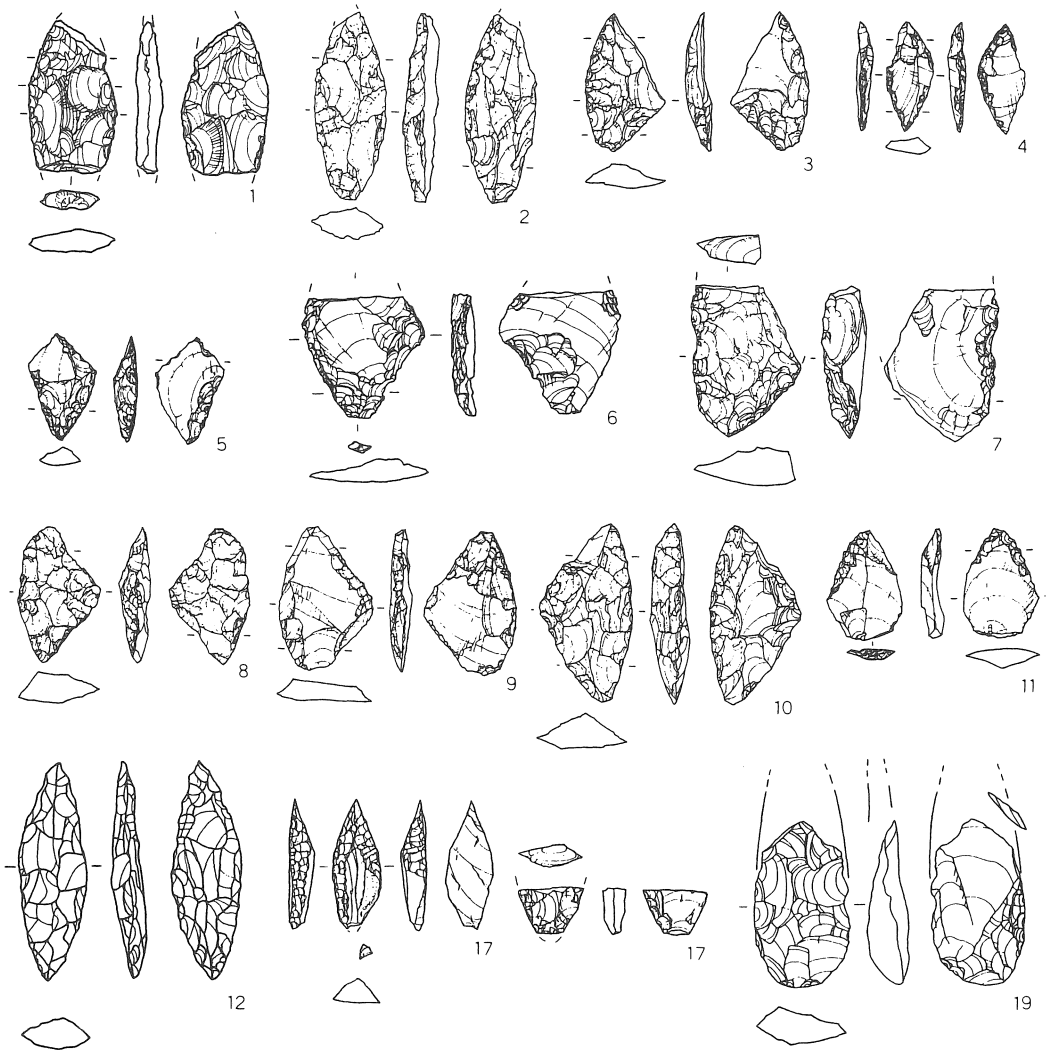
第３表　武蔵野台地の尖頭器一覧表

No.	遺跡名		石材	残存状況	形態	長さ	加工	樋状剥離	備考	報文図版
21	武蔵関遺跡	1	ホルンフェルス	両端欠	木葉形	—	両面調整	無		18図-13
23	葛原遺跡	2	安山岩	先端欠	木葉形	—	両面調整	無	２～７が第Ⅰ文化層、８～11が第Ⅱ文化層	36図-1
		3	チャート		左右非対称	3.7	半両面調整	有		36図-2
		4	黒耀石		木葉形	3.0	周縁調整	有		36図-3
		5	チャート		左右非対称	2.9	半両面調整	無		36図-5
		6	珪質頁岩	上半分欠	左右非対称	—	半両面調整	不明		36図-4
		7	チャート	上半分欠	未製品？	—	片面調整			36図-6
		8	チャート		左右非対称	3.7	両面調整	無		60図-94
		9	チャート		左右非対称	3.9	片面、周縁調整	無		60図-95
		10	頁岩		左右非対称	4.9	両面調整	有		60図-96
		11	チャート		木葉形	3.0	周縁調整	無		60図-99
24	武蔵関北遺跡	12	安山岩		木葉形	7.5	両面調整	無	12～14は尖頭器？	21図-25
		13	黒耀石				周縁調整	無		21図-26
		14	黒耀石				周縁調整	無		21図-27
		15	黒耀石				周縁調整	無		21図-28
		16	黒色頁岩	上半分欠			片面調整	無		21図-29
27	御殿山遺跡	17	黒耀石	先端欠	木葉形	3.5	片面調整	無		50図-1
		18	黒耀石	基端部のみ		—		不明		50図-2
30	日陰山遺跡	19	チャート	上半分欠	木葉形	—	半両面調整	不明		65図-87

形両面調整尖頭器の出土例は見受けられず、層位的にⅢ層のソフトロームからⅣ層のハードロームと、砂川期からより新しい時期の石器が混在したときに区分が難しいと思われる。

葛原遺跡Ｂ地点第Ⅰ／Ⅱ文化層からは、ナイフ形石器81点に対し尖頭器が10点出土し、器種組成に占める割合は10％（全体では１％）と高い。出土状況は、やや限定された石器集中にまとまり、ナイフ形石器が集中する石器集中とはわかれる傾向がみられるが、あえて分離する根拠もないようである。２は先端を欠くが、安山岩製で両面調整の左右対称の尖頭器である。３は半両面調整で右側縁の樋状剥離が施されている。外形は右側縁が弧状を呈し、左側縁が張り出すように屈曲する左右非対称で５・６？・８・９・10と共通する。４は唯一黒耀石製の尖頭器で、周縁調整の左右対称である。左側に樋状剥離がみられるが「剥離面と腹面の角度が他の尖頭器より大きい」（前田・廣田　1987）ことから衝撃剥離の可能性も想定される。８と10は両面調整で10は左側縁に樋状剥離が施されている。11は縦長剥片の打面を基端に残し、上半部の周辺調整よって先端を作り出している。やや幅広であるが、下森鹿島遺跡の７、中村遺跡Ｃ区の10と共通する。尖頭器に用いられている石材は、チャートを主に頁岩等がみられる。

武蔵関北遺跡第Ⅱ文化層は尖頭器５点が出土している。12の両面調整のものと、周縁調整、片面調整がみられるが、黒耀石製のものは尖頭器なのか報告書からではよくわからない。



第５図　武蔵野台地出土の尖頭器

御殿山遺跡Ⅳ層上部は尖頭器２点が出土している。出土状況は広範囲に遺物が密集する地点からの検出である。17は片面調整、18は基部破片のため詳細は不明である。

日影山遺跡第Ⅱ文化層では、ナイフ形石器の石器集中から離れた地点で、尖頭器を主体とする石器集中が１ヶ所検出されている。黒耀石製の樋状剥離を有する尖頭器が含まれるが、ブロックⅠ群に伴うのかブロックⅡ群に伴うのは、あるいはそれより新しい時期なのかは定かでない。ブロックⅡ群の石器集中から検出された尖頭器19は、チャート製の木葉形半両面調整である。樋状剥離に関しては欠損しているため不明である。

上記で取り上げた遺跡以外にも、幾つかの報告で尖頭器の共伴が指摘されている。打越遺跡第２地点は石器集中よりやや離れて黒耀石製の樋状剥離を有する尖頭器が検出されている、報文にとると縄文時代の土壙底部からの検出で、共伴とは考えづらい。吉祥寺南町１丁目遺跡Ｅ地点は、「明確な尖頭器は組成しない」としながら実測図に尖頭器と分類させている石器が２点掲載されている

が、小破片ため定かではない。

［入間川流域］

入間川を挟んで入間台地と武蔵野台地の、約５㎞の範囲に砂川期の遺跡がまとまっている。本地域で砂川期に尖頭器が伴って例はなく、僅かに鶴ヶ丘遺跡Ｃ区で砂川期石器群と尖頭器が報告されているが、打越遺跡第２地点と同様、出土状況から明確に分離される。

［大宮台地］

大宮台地の砂川期石器群の出土層位は、殆どがソフトローム層中である。その為、砂川期石器群と尖頭器を層位的に区分することは不可能である。今回分析した大宮台地の砂川期の遺跡で尖頭器が出土しているのは、在家遺跡と叺原遺跡である。在家遺跡に関しては、複数時期の石器が混在している可能性があり、ここでは検討対象としない。叺原遺跡は、砂川期の石器集中９ヶ所と尖頭器石器群の集中１ヶ所が検出されている。考察編の中で石器石材、母岩別分類、接合関係から砂川期の石器集中９ヶ所は緊密な関連性がみられたのに対し、尖頭器石器群の集中は他の石器集中と没交渉的で、分離されると考えた。この考えは現在も基本的には変わっていないが、叺原遺跡の尖頭器の外形は、寸詰まりで肩が張り出す形状で葛原遺跡Ｂ地点の尖頭器と共通する部分もあり、今後の検討課題としたい。

［武蔵野台地／入間台地／大宮台地の樋状剥離を有する尖頭器］

武蔵野台地／入間台地／大宮台地の状況をみてきたが、当該地域では尖頭器の共伴が指摘されている遺跡が、石神井川中流域と井の頭池周辺と比較的限定された地域にまとまっている。また、仮に大宮台地の叺原遺跡の尖頭器が共伴だとすると、直線的に近距離に並ぶことになり、下総台地との関連性も注目されるが、なお慎重な検討が必要であると考える。

樋状剥離を有する尖頭器は、葛原遺跡Ｂ地点を除くとまとまった資料は殆どない。また、相模野台地の樋状剥離を有する尖頭器は左右対称形になるものが多いのに対し、葛原遺跡は寸詰まりで肩が張る形状でかなり異なっており。前者を男女倉型、後者を東内野型と区分する場合が多いが、特に後者は下総台地の東内野型尖頭器石器群とのギャップがあるように見受けられる。ここではあくまで、樋状剥離を有する尖頭器と解釈しておく。その他の尖頭器に関しては両面調整、周縁調整がみられる、葛原遺跡Ｂ地点の11と下森鹿島遺跡の７、中村遺跡Ｃ区の９・10に共通する要素があり、部分的には似た様相もみられる。

一方、武蔵野台地／大宮台地では、砂川期石器群とは共伴しないかたちで、黒耀石製の樋状剥離を有する尖頭器の製作又はメンテナンスと関わる遺跡が報告されている。西武蔵野遺跡は石器集中８ヶ所が環状に並び、それを囲むように11基の礫群を伴っている。樋状剥離を有する尖頭器は１点であるが、削片、尖頭器の調整剥片が多量に出土しており、尖頭器の製作が集中的におこなわれたことが想定される。また、縦長剥片を素材とした先刃掻器、各形態の彫器が出土している。ナイフ形石器は２点検出されたが、尖頭器石器群と黒耀石の強い関連性がみられる中で、２点とも頁岩製で、関連する剥片類は非常に少なく、ナイフ形石器が“構造外的存在”であるいえる。

竹橋門遺跡は西武蔵野遺跡よりは規模が小さいが、肩の張り出す左右非対称の樋状剥離を有する尖頭器と削片がまとまって検出されている。ナイフ形石器は出土していない。

花ノ木遺跡では樋状剥離を有する尖頭器の未製品と思われる石器２点と、多量の砕片と削片、削器が出土している。比較的近接する遺跡として、城山南遺跡から樋状剥離を有する尖頭器と削片が出土している。また、丸山東遺跡では砂川期より下層の文化層から樋状剥離を有する尖頭器がまとまって出土しているが、なお検討を有するかもしれない。

下柳沢遺跡第３文化層から破損した樋状剥離を有する尖頭器の接合資料が検出されており、調整剥片等もみられることから、製作工程等の分析に貴重な資料となっている。ナイフ形石器が３点伴うが、砂川期のナイフ形石器とは異なっている。

以上、丸山東遺跡を除く５遺跡は、黒耀石製の樋状剥離を有する尖頭器と共に削片等が出土しており、製作又はメンテナンスと深く関わる遺跡と考えられるが、ナイフ形石器は伴わないか、もしくは少量のみで、ナイフ形石器の側からの編年的位置付けを難しくしている。

吉祥寺南町三丁目遺跡Ｂ地点は、涙滴形ナイフ形石器がまとまっており、それに伴って樋状剥離を有する尖頭器２点を主体とした尖頭器石器群が検出されている。ナイフ形石器の形態から砂川期直後に位置付けるのが妥当と考えられるが、それによって、他の資料をこの段階に置くことには、なお慎重に検討する必要がある。

大宮台地は、中川貝塚などで単独出土のものが僅かにみられるが、まとまった資料は戸崎前遺跡だけである。戸崎前遺跡からは、尖頭器の破損品と削片、ナイフ形石器が出土している。ナイフ形石器は縦長剥片を素材に幅広で基端に打面を残し、基部がやや丸くなる形状で終末期のナイフ形石器に含まれると思われる。

［砂川期前後段階の尖頭器］

上記で武蔵野台地／入間台地／大宮台地の樋状剥離を有する尖頭器について検討し、黒耀石製の樋状剥離を有する尖頭器の多くが、砂川期以降の可能性が高いことをみてきたが、相模野台地では近年、砂川期よりも古い段階の遺跡から、尖頭器が検出されており、発生の問題を含めて注目されてきている。

まず、岩宿Ⅱ期の後半に相当する、下九沢山谷遺跡第Ⅳ文化層、高座渋谷団地遺跡Ⅴ文化層から尖頭器状石器が出土している。２遺跡とも黒耀石以外の石材で作られており、半両面調整、両面調整のセットで、半両面調整の尖頭器には片側縁に面を残し、樋状剥離を有する尖頭器の祖形のようにもみえる。同一段階と考えられる大宮台地と武蔵野台地の遺跡は、新屋敷遺跡Ｃ・Ｄ区、明花向遺跡Ｃ区、堂ヶ谷戸遺跡第33次調査、比丘尼橋遺跡Ｂ地点Ⅳ層と最近資料が充実してきた。その中で、尖頭器と関連すると思われる石器は、比丘尼橋遺跡Ｂ地点の両面調整石器だけで、他の遺跡からは尖頭器石器群の痕跡はみられない。

砂川期の直前もしくは古段階の遺跡といして、大和市№210遺跡第Ⅱ文化層と用田バイパス鳥居前遺跡の資料がある。大和市№210遺跡と用田バイパス鳥居前遺跡が共に安山岩製の樋状剥離を有する尖頭器の製作遺跡であるとして、尖頭器の出現期問題と関連して積極的に評価する考え（栗原2000）もあるが、資料的制約もあり明確にはされていない。しかし、尖頭器の出現期／受容期の問題を考えるときに重要なヒントになるかもしれない。

以上、砂川期の尖頭器に関して検討をおこなってきたが、最後に若干整理しておく。

現在の多摩川を挟んで、相模野台地／多摩丘陵の殆どの遺跡で尖頭器が共伴している。一方で武蔵野台地／入間台地／大宮台地では、多くの遺跡で尖頭器の明確な共伴はみられない。また、相模野台地と武蔵野台地の尖頭器をみると、周辺調整の尖頭器の一部は近似するが、樋状剥離を有する尖頭器の形態は異にしている。両地域における尖頭器の受容のしかたが均一でなかったと思われる。

武蔵野台地／大宮台地は、黒耀石製の樋状剥離を有する尖頭器の多くが砂川期よりも新しい、涙滴形ナイフ形石器に伴う可能性が高い。しかし、尖頭器の製作に関わると思われる遺跡からナイフ形石器の良好な出土がないため、ナイフ形石器の製作と尖頭器の製作が場を違えているのか、遺跡の規模の縮小によってそのようにみえてしまうのか、複眼的な検討がなお必要である。

相模野台地においても、まだ資料は少ないが尖頭器の出現期／受容期が砂川期より遡る可能性が指摘されている。尖頭器の問題に関しては、一層複雑な様子を呈してきている。

4．おわりに

2000年の「砂川」シンポジウムで言い足りなかったことを、『石器文化研究』10号に書く予定であったが、11月５日の衝撃によって、書くための準備を整えることがでず、シンポジウム及びそれ以降に発表された論文への感想を、簡単に述べるだけになってしまった。

シンポジウム以降、特に『石器文化研究』10号の誌上で多くの方からご批判をいただいた。シンポジウムの時に言い足りなかったこと、批判に対しては勉強不足を率直に認めながら、「砂川」とどのように向き合うべきかを考え、改めて基礎的検討の必要性を感じた。

本稿を書き始める段階で、発表要旨を整理しなおせば簡単にすむと思い、ナイフ形石器の大きさの検討を少しおこなおうと考えていた。しかし、いざ始めると簡単には進まず、やらなければならないことの多さに愕然としてしまった。筆者の力量で、これら多くの問題に対し総合的な検討をくわえることは到底できず、今回は基礎的研究(1)として各地域の遺跡の規模等と、前から気にしていた尖頭器の問題を中心に考えることにした。今後は、基礎的研究の続きとして、砂川期研究で最も重要はテーマである、ナイフ形石器に関し検討をくわえたいと考えている。また、白石氏から批判があった研究史に関しても、今回言及することができなかった。ナイフ形石器の検討と共に考えて行ければと思う。

本稿の執筆に際して、シンポジウムの準備段階から今日まで御教授、御協力を頂いた白石浩之氏、田中英司氏、砂田佳弘、諏訪間　順氏、伊藤　健氏、亀田直美氏、栗原伸好氏、野口　淳氏、仲田大人氏、国武貞克氏、石器文化研究会の諸氏には心より深謝いたします。

また、亀田直美氏、栗原伸好氏からは文献に関して便宜をはかってもらった、改めて感謝したします。

註

註１　関東地方の地図は、橋本勝雄氏の1998年「関東細石器考」掲載の図版をトレースしたものを使用した。

註２　分析対象とした遺跡で前原遺跡は、埼玉県宮代町と東京都小金井市の２遺跡ある。区分するために便宜的に本遺跡を宮代町前原遺跡と呼称する。宮代町前原遺跡は、石器の総数が約800点である。少数の製品と石核を除くと小形の砕片が殆どである。剥片・砕片の個別データが掲載していないが、全体の傾向は掴めると考え数値化し扱った。

註３　尖頭器と砂川期石器群が検出されている。その共伴の有無については、報告書で尖頭器は石器集中外となっている。また、報告書掲載実測図を見る限り、ナイフ形石器に関しても複数時期の石器群が混在しているようにみえる。今回の分析では、遺跡全体を扱うことはせずナイフ形石器のみのデータを扱った。また、尖頭器の共伴に関しては留保する。

註４　ナイフ形石器の大きさは報告書掲載図面から計測した。

註５　ソフトロームからハードロームにかけて砂川期の石器群と尖頭器石器群が出土している。筆者は報告書（考察編）執筆の際、検出された10ヶ所の石器集中を接合及び母岩の共有関係を検討し、砂川期の９ヶ所の石器集中では緊密な関係が見られるのに対し、尖頭器石器群の石器集中は排他的関係にあり。石器石材の嗜好性も異なることから共伴関係は認められないとした。また、事実記載の項で、尖頭器石器群の石器集中の中にナイフ形石器と分類された石器があるが、掻・削器としたほうが妥当であると考えている。

註６　富士見一丁目遺跡は、砂川期石器群と共に細石器及び岩宿Ⅱ期のナイフ形石器が出土している。堆積層位が薄く石器石材の殆どが黒耀石であるため分離が難しいようであった。また、細石核と上ヶ屋型彫器が同一母岩とされているが、報文中でも指摘されているように、肉眼観察での限界の可能性もあり、細石核のみを分離した。

註７　ナイフ形石器の計測等のデータは、田中氏の1997年論文を使用した。また、石材の名称に関しても同じである。

註８　城の腰遺跡の報文中、石器石材の項目で緑色黒曜石と記載されている石材があるが、巻頭カラー図版を見る限りチャートと思われる。本文中ではチャートとして扱った。

註９　中砂遺跡は北面の緩い斜面に立地する。ロームの堆積は北から南に薄くなり、遺物が密集する部分が最も薄くなっている。そのため遺物を層位的に検出することができなかった。また、遺物分布は礫群は単位が明確であるのに対し、石器は広範囲に散漫に広がっており、砂川期と岩宿Ⅱ期の石器群が混在して出土している。その為、明確に砂川期のナイフ形石器として分離できる資料のみを対象とした。

註10　打越遺跡第２地点は、石材に関する記載は部分的であるため、全体の石材組成は不明である。なお、ナイフ形石器の大きさは、報告書図版から計測した。

註11　器種の組成表、石材組成表、器種ごとの石材組成表は掲載されているが、個別の石器の一覧表がないため。各ナイフ形石器の石材は不明である。また、ナイフ形石器の大きさは報告書図版から計測した。

註12　第４ブロックから両端を欠損した両面調整の尖頭器と、大形両面調整で薄手の尖頭器の上半部が３点に破損して検出されている。報告書によると２点とも砂川期との共伴が指摘されており、遺物分布図を見る限り、出土状況からは分離が難しい。しかし、小形のものはともあれ大形の尖頭器が砂川期に伴った事例はなく、本稿では検討の対象外とした。

註13　ナイフ形石器の大きさは報告書図版から計測した。

註14　報告書では当該期を第Ⅰ文化層と第Ⅱ文化層に分けているが、遺物分布が補完的であり、尖頭器の形態があまり変わらないことから、一括して扱った。なお、第Ⅰ文化層とした石器集中からナイフ形石器多数検出さ

れているのに対し、第Ⅱ文化層とされた石器集中からは1点しか出土していない。また、尖頭器の分布が限定的であることから、報告書とは異なる2時期細分も可能かもしれない。

註15　石器集中は第Ⅲ層と第Ⅳ層から各1ヵ所検出されているが、石器群の内容等から分離する要素はみられず一括して扱った。また、礫群も同様である。

註16　報告書に器種及び石材組成表が掲載されておらず、報文中の各石器の説明が無いため、フロッピーのデータからカウントした。その為、各項目で点数の齟齬がみられるが、全体の傾向は把握できるものと考える。なお、報文中で示された、Ⅶ層とⅨ層の石器群と黒耀石第1母岩は対象外とした。

註17　第2文化層はⅢb層下部からⅣb層上部にかけて検出されている。遺物の出土層位の上下差と石器集中の分布、石材組成から石器集中をブロック群Ⅰ、Ⅱa、Ⅱb、Ⅱcの4つに分けて検討している。その結果、ブロック群Ⅰをナイフ形石器終末期、ブロック群Ⅱを砂川期としている。しかし、ブロック群Ⅱの中でⅡcとされたブロック24／25号は、他のブロック群と離れており、また樋状剥離を有する尖頭器と涙滴形ナイフ形石器が検出されるなど、砂川期に含めるかは疑問である。よって、本稿で検討対象としなかった。

註18　ナイフ形石器の大きさは、報告書図版から計測した。石材等は石器個別の記載がないため、全体の石材組成表を使った。ナイフ形石器の石材組成は不明とした。

註19　ナイフ形石器の大きさは、報告書図版から計測した。石材組成は掲載されていないため不明である。また、ナイフ形石器の石材は、実見の際に筆者の判断によって硬／珪質頁岩と判断した。

註20　遺物の分布図を見ると複数の石器が集中する地点があるが、報告書では全てグリッド単位で示している。

註21　ナイフ形石器の大きさは報告書図版から計測した。

註22　ナイフ形石器の大きさは報告書図版から計測した。

註23　深見諏訪山遺跡のデータは、報告書と諏訪間・堤氏の「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第Ⅳ文化層の石器群について」の両方を使った。

註24　砂川期の最新のデータは、中原遺跡の炉跡内の炭化物から14C18,950±100B.P.、補正14C18,920±100B.P.。吉岡遺跡B1層資料14C19,500±260B.P.というデータがえられている。

註25　石材組成で全体の50％以上を占める石質を主石材とし、50％未満で最も多く用いられている石質を主な石材と便宜的に区分した。

参考文献

赤石光資 他　1993『在家遺跡―第1次調査―』上尾市遺跡調査会調査報告書第4集

上尾市教育委員会編　1992『上尾市史　第1巻　資料編1原始・古代』上尾市

麻生順司　1987『長堀南遺跡発掘調査報告書』大和市文化財調査報告書第28集

麻生順司　1993『下森鹿島遺跡発掘調査報告書（先土器時代編）』下森鹿島遺跡発掘調査団

荒井幹夫　1976「第6章　打越遺跡第2地点」『富士見市文化財報告ⅩⅠ』富士見市教育委員会

磯野治司　1996『提灯木山遺跡第2次調査』北本市遺跡調査会報告書第2集

伊藤恒彦 他　1987『中村遺跡』中村遺跡発掘調査団

伊藤恒彦 他　1991『真光寺・広袴遺跡群Ⅴ』鶴川第二地区遺跡調査会

伊藤　健 他　1989『赤山　本文編・第1分冊』川口市遺跡調査会報告第12集

伊藤　健　2001「「砂川」研究における課題と成果」『石器文化研究』10 石器文化研究会　pp175－188

伊藤　健・三瓶裕司　2000「石器組成とブロックの規模からみた「砂川」―石器経済活動の空間的組織―」『石器文化研究』9 石器文化研究会　pp209－234

伊藤博司　1991『城の腰遺跡・霞台遺跡（第８次）』青梅市教育委員会
織笠　昭・松村明子 他　1976『前原遺跡』国際基督教大学考古学研究センター
織笠　昭　1980「１　ナイフ形石器の小形化について」『神奈川考古』第８号 pp106－117
加藤秀之 他　1987『武蔵野市御殿山遺跡第１地区Ｄ地点』御殿山遺跡調査会
河野重義 他　1993『武蔵関北遺跡』武蔵関北遺跡調査会
窪田恵一　1995『丸山東遺跡Ⅰ』東京外かく環状道路練馬地区遺跡調査会
黒尾和久 他　1986『天祖神社東遺跡』練馬区教育委員会　練馬区遺跡調査会
金山喜昭 他　1984『橋本遺跡　先土器時代編』相模原市橋本遺跡調査会
国武貞克 他　1999『日影山遺跡・東山道武蔵路』西国分寺地区遺跡調査会
国武貞克　2000「石材消費からみた領域　―台地外石材による遺跡連鎖を標識として―」『石器文化研究』9　石器文化研究会　pp235－261
国武貞克　2001「武蔵野台地・大宮台地の面取り尖頭器」『有樋尖頭器の発生・変遷・終焉』予稿集　千葉県立房総風土記の丘　pp31－52
栗島義明 他　1983『多聞寺前遺跡Ⅱ』多聞寺前遺跡調査会
栗原伸好　2000「槍先形尖頭器の変遷　～相模野台地における「砂川期」石器群の例を中心に～」『石器文化研究』9　石器文化研究会　pp23－31
黒坂禎二　1998『富士見一丁目遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第189集
小池　聡　1991『長堀北遺跡』大和市文化財調査報告書第39集
島田和高　1997「南関東の槍先形尖頭器」『九州旧石器』第３号 九州旧石器研究会　pp99－108
島立　桂　2001「相模野台地における有樋尖頭器」『有樋尖頭器の発生・変遷・終焉』予稿集　千葉県立房総風土記の丘　pp53－62
白石浩之　1989『旧石器時代の石槍』東京大学出版会
白石浩之　1997「石槍の分布とその様相　―樋状剥離尖頭器から見た集団の動き―」『人間・遺跡・遺物』3　発掘者談話会　pp27－47
白石浩之　1999「旧石器研究の論争とその意義　―石槍の出現を中心として―」『石器文化研究』7　石器文化研究会　pp277－288
白石浩之　2001『石槍の研究　―旧石器時代から縄文時代初頭期にかけて―』ミュゼ
白石浩之　2001「茂呂系ナイフ形石器砂川期の諸問題」『石器文化研究』10 石器文化研究会　pp19－22
杉本正文　1984『地蔵坂』杉並区埋蔵文化財報告書第12集
鈴木次郎　1984『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告３
鈴木次郎　1996『宮ヶ瀬遺跡群Ⅵ　サザランケ（No.12）遺跡』かながわ考古学財団調査報告８
鈴木次郎　1997『宮ヶ瀬遺跡群Ⅹ　中原（No.13C）遺跡』かながわ考古学財団調査報告16
鈴木次郎　1997『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅡ　中原（No.13）遺跡』かながわ考古学財団調査報告18
諏訪間　順 他　1984『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅲ』大和市文化財調査報告書第17集
諏訪間　順 他　1893『深見諏訪山遺跡』大和市文化財調査報告書第14集
諏訪間　順・堤　隆　1985「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第Ⅳ文化層の石器群について」『旧石器考古学』30 旧石器文化談話会　pp85－108
関口博幸　1992「槍先形尖頭器の変容過程　―相模野台地における槍先形尖頭器の製作と廃棄のプロセス―」『研究

紀要』10 群馬県埋蔵文化財調査事業団　pp１－26
石器文化研究会編　2000『石器文化研究８　シンポジウム砂川―その石器群の地域性―　資料集成　南関東各地域の基礎的検討』石器文化研究会
田代　治　1993『C－26号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第41集
田中英司　1979「武蔵野台地Ⅱｂ期前半の石器群と砂川期の設定について」『神奈川考古』第７号　pp65－74
田中英司　1980「２　尖頭器の共存について」『神奈川考古』第８号　pp117－122
田中英司　1984「砂川型式期石器群の研究」『考古学雑誌』第69巻　第４号 pp１－33
田中英司　1997「川越市鶴ヶ丘遺跡Ｃ区の石器群」『研究紀要』第13号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　pp１－12
玉口時雄　他　1989『高稲荷遺跡』練馬区遺跡調査会
戸沢充則　1968「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』第４巻　第１号　pp１－42
戸沢充則・安蒜正雄・鈴木次郎・矢島國雄　1974『砂川先土器時代遺跡　埼玉県所沢市砂川遺跡の第２次調査』所沢市教育委員会
長崎潤一　1991『お伊勢山遺跡の調査　第２部旧石器時代』早稲田大学
西井幸雄　1986『中砂遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第60集
西井幸雄　1996a「大宮台地のおける砂川期の様相」『埼葛地域文化の研究』　pp.１－19
西井幸雄　1996b『栗屋／屋渕／中台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第171集
西井幸雄　1996c『坂東山／坂東山西／後Ｂ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第166集
西井幸雄　2000「「砂川」の空間的枠組みをめぐって」『石器文化研究』９　石器文化研究会　pp53－74
西井幸雄　2001「「砂川」の空間的枠組みについて」『石器文化研究』10 石器文化研究会　pp89－94
西井幸雄・秋山幸治　1983『前原遺跡』宮代町文化財調査報告書第１集
西井幸雄・栗岡　潤　1995『西久保／金井』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第156集
西井幸雄・吉田健司　1987『叺原遺跡（考察編）』川口市文化財調査報告書第25集
橋本恵美子・窪田恵一　1987『武蔵関遺跡』練馬区遺跡調査会
橋本勝雄　1998「関東細石器考」『千葉県立中央博物館研究報告』第５巻　第２号　千葉県立中央博物館　pp117－135
畠中俊明・井関文明　他　1999『福田丙二ノ区遺跡』かながわ考古学財団調査報告書68
廣田吉三郎・前田　顕　1987『葛原遺跡Ｂ地点調査報告書』練馬区遺跡調査会
藤波啓容　他　1983『前戸崎遺跡』上尾市文化財調査報告第17集
三瓶裕司　2001「砂川期、石材利用における地域差―ブロック規模と石材組成から見た石材利用の空間領域―」『石器文化研究』10 石器文化研究会　pp143－174
宮塚義人・矢島國雄・鈴木次郎　1974「神奈川県本蓼川遺跡の石器群について」『史館』３
武藤康弘・大竹憲昭　他　1981『廻沢北遺跡　第５・６次調査概報』世田谷区教育委員会
望月　芳　1996『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書　第３巻　先土器時代』藤沢市教育委員会
山下秀樹　他　1983『久保山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第29集
山村貴輝　他　1996『吉祥寺南町三丁目遺跡Ｂ地点』吉祥寺南町遺跡調査団
吉田邦夫　1999「吉岡遺跡群から出土した炭化材の放射性炭素炭素年代」『吉岡遺跡群Ⅸ　考察編・自然化学分析編』かながわ考古学財団調査報告49　pp319－336
吉田健司　1985『叺原遺跡（先土器・縄文時代編）』川口市文化財調査報告書第23集

研 究 紀 要　第17号

２００２

平成14年３月25日　印　刷

平成14年３月29日　発　行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4－4－1

電話　0493－39－3955

印　刷　関東図書株式会社